巻 頭 写 真 図 版

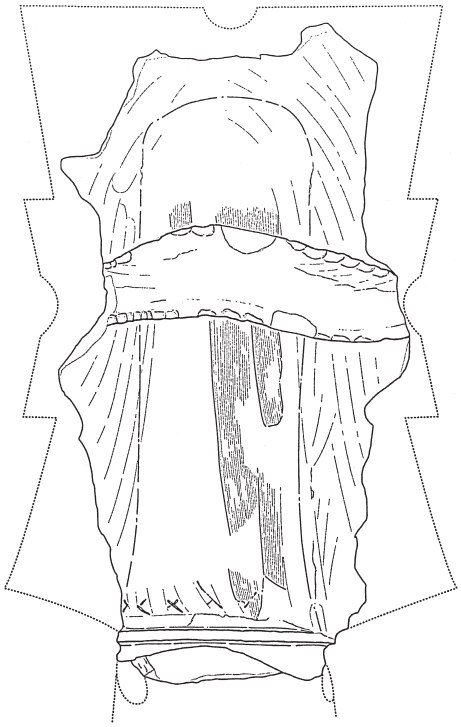
１．ＯＧ 2013 －１　周溝１全景（北から）

２．ＯＧ 2013 －１　石見型埴輪・ＯＧ 2013 －２　盾形埴輪

四 條 畷 市 文 化 財 調 査 年 報

第　4　号

大上遺跡（大上古墳群）



平成２９（２０１７)年３月

四條畷市教育委員会

例　　言

1．　本書は、四條畷市文化財調査年報の第４号であり、四條畷市文化財調査報告の第 54 集である。本書には、平成 26(2014)年１月と同年２月から４月にかけて宅地造成・賃貸住宅建設（ＯＧ2013－１）と老人福祉施設建設（ＯＧ2013－２）に伴い大上遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。

2．　大上遺跡（ＯＧ2013－１）の発掘調査は、南畑嘉明氏からの依頼を受け実施した。大上遺跡（ＯＧ2013－２）の発掘調査は、社会福祉法人山麓会からの依頼を受け実施した。いずれも四條畷市教育委員会が調査を実施し、調査期間等は本文中に記載している。

3．　大上遺跡（ＯＧ2013－１・ＯＧ2013－２）の発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主任　村上　始・事務職員　實盛良彦（肩書はいずれも当時）を担当者として実施した。

4．　大上遺跡（ＯＧ2013－１）の発掘調査実施にあたっては、南畑嘉明氏、地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。大上遺跡（ＯＧ2013－２）の発掘調査実施にあたっては社会福祉法人山麓会、地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。記して厚く感謝の意を表したい。

5．　発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

　大阪府教育庁文化財保護課、埴輪検討会、櫻井敬夫氏（故人）、瀬川芳則氏（元関西外国語大学教授）、河内一浩氏（羽曳野市立人権文化センター）、和田一之輔氏（奈良文化財研究所）、関真一氏、原田昌浩氏（大阪府教育庁）、辻川哲朗氏（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）、金澤雄太氏（御所市教育委員会）、鐘方正樹氏、村瀬陸氏（奈良市埋蔵文化財調査センター）、阿部功氏（神戸市教育委員会）、花熊祐基氏（伊丹市教育委員会）、濱田延充氏、丸山香代氏（寝屋川市教育委員会）、渡井彩乃氏（高槻市立今城塚古代歴史館）、森本徹氏（大阪府立近つ飛鳥博物館）、木村理氏（大阪大学大学院）、小堀僚氏（奈良大学大学院）、野島稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館館長）。（順不同）

6．　出土遺物の整理・図面作成などは、四條畷市教育委員会教育部上席主幹兼主任　村上　始、事務職員　實盛良彦が、臨時職員　田伏美智代の協力を得て行なった。出土埴輪の図化については木村　理氏・村瀬　陸氏の助力を得た。

7．　本書は、村上・實盛が、分担して執筆・編集を行なった。出土埴輪の報文の一部は木村氏・村瀬氏が執筆した。文責者は各文末に記載している。

8．　発掘調査の出土遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．　本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。

2．　土色の色調は、1998 年度版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

3．　報告図面のうち、調査地区平面図の表示方位は特に注記がない限り磁北である。

本　文　目　次

巻頭写真図版
例　言・凡　例
目　　　次
第１章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
　第１節　遺跡の位置
　第２節　周辺の歴史的環境
第２章　大上遺跡（ＯＧ2013－１・２）調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第１節　既往の調査
　　１．遺跡の概要と発見
　　２．1992-1 次調査（大上１号墳）
　　３．1992-2 次調査（大上２号墳）
　　４．1993-1・1994-1 次調査（大上９号墳）
　　５．1996-1・1997-1 次調査
　　６．大上３号墳の調査
　　７．1998-1・3 次調査（大上 10 号墳）
　　８．1998-2 次・1999-1 次調査（大上４・５・11 号墳）
　第２節　ＯＧ2013－１調査の経過
　第３節　ＯＧ2013－２調査の経過
第３章　大上遺跡（ＯＧ2013－１）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　第１節　基本層序
　第２節　検出遺構
　第３節　出土遺物
第４章　大上遺跡（ＯＧ2013－２）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　第１節　基本層序
　第２節　検出遺構
　第３節　出土遺物
第５章　大上遺跡（大上古墳群）調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　第１節　調査のまとめ
　第２節　大上古墳群の全容
参　考　文　献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
写　真　図　版
報告書抄録

挿　　図　　目　　次

第１図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
第２図　1992-1 次調査（大上１号墳）平面図と１号埋葬施設・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第３図　1992-2 次調査（大上２号墳）平面図と遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第４図　1994-1 次調査（大上９号墳）平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第５図　大上３号墳平面図と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第６図　1998-2 次調査（大上４・５号墳）・1999-1 次調査（大上 11 号墳）平面図　・・・・・・15
第７図　調査地区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第８図　調査地区平面図（ＯＧ2013－１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第９図　調査地区断面図（ＯＧ2013－１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第10図　周溝１遺物出土状況図（ＯＧ2013－１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第11図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第12図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第13図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第14図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第15図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第16図　調査地区平面図（ＯＧ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31～32
第17図　調査地区断面図（ＯＧ2013－２）（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第18図　調査地区断面図（ＯＧ2013－２）（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第19図　周溝１遺物出土状況図（ＯＧ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第20図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第21図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第22図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第23図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第24図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第25図　大上古墳群の古墳位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

第１表　大上古墳群の古墳一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

写　真　図　版　目　次

写真図版１　１．ＯＧ2013－１　調査地区西側Ｐｉｔ群全景（北から）
　　２．ＯＧ2013－１　周溝１遺物全景（西から）
写真図版２　１．ＯＧ2013－１　周溝１遺物出土状況（北から）
　　２．ＯＧ2013－１　周溝１遺物出土状況（北西から）
写真図版３　１．ＯＧ2013－１　周溝１動物骨出土状況（北から）
　　２．ＯＧ2013－１　周溝１完掘状況（北西から）
写真図版４　１．ＯＧ2013－２　１地区　遺構全景（北から）
　　２．ＯＧ2013－２　１地区　周溝１遺物出土状況（北西から）
写真図版５　１．ＯＧ2013－２　２地区　遺構全景（北西から）
　　２．ＯＧ2013－２　２地区　遺構全景（北東から）
写真図版６　１．ＯＧ2013－２　２地区　遺構全景（南西から）
　　２．ＯＧ2013－２　２地区　周溝２馬歯出土状況（南から）
写真図版７　１．ＯＧ2013－２　２地区　周溝２遺物出土状況（北から）
　　２．ＯＧ2013－２　２地区　土坑 40 遺物出土状況（北から）
写真図版８　１．ＯＧ2013－１　出土遺物（１）
　　２．ＯＧ2013－１　出土遺物（２）
写真図版９　１．ＯＧ2013－１　出土遺物（３）
　　２．ＯＧ2013－１　出土遺物（４）
写真図版10　１．ＯＧ2013－１　出土遺物（５）

写真図版11　１．ＯＧ2013－２　出土遺物（包含層）
　　２．ＯＧ2013－２　出土遺物（確認調査）
写真図版12　１．ＯＧ2013－２　出土遺物（周溝１）
　　２．ＯＧ2013－２　出土遺物（周溝１）
写真図版13　１．ＯＧ2013－２　出土遺物（周溝２）
　　２．ＯＧ2013－２　出土遺物（土坑）

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讃良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。大上遺跡は、飯盛山系の西側の山裾部に位置する遺跡である。

第２節　周辺の歴史的環境

大上遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物がみつかっている（第２図）。

旧石器時代　讃良川床遺跡では旧石器時代の握斧・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している（櫻井 1972）。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている（片山 1967a）。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形尖頭器が出土している（野島・藤原・花田 1976）。

縄文時代　縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡（野島 1978b）、四條畷小学校内遺跡（野島 1994c）、木間池北方遺跡（村上 1997a）などでみつかっている。讃良郡条里遺跡の第二京阪道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている（井上ほか編 2003、佐伯ほか編 2007、井上編 2008 等）。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている（野島 1978b、1988）。

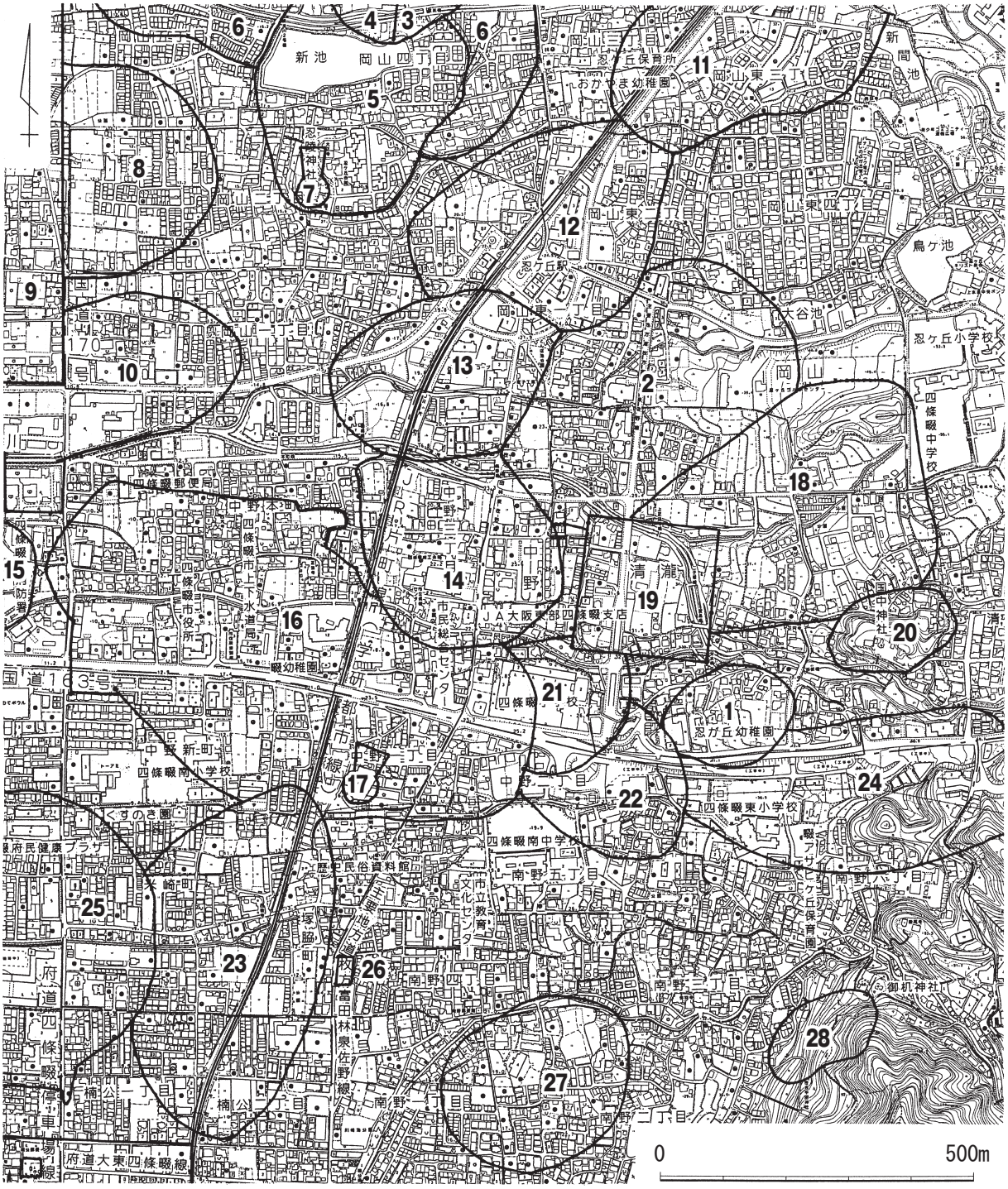
砂遺跡では中期から晩期の集落跡がみつかっている（宮野1992、四條畷市教育委員会編2008）。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の讃良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製祭祀具をはじめ、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土壙墓が複数確認されている（片山 1967b、桜井 1972、宮野 1992、野島編 2000）。

弥生時代　弥生前期初頭の土器が縄文晩期の突帯文土器とともに讃良郡条里遺跡の 2005 年の調査でみつかっている（中尾ほか編 2009）。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稲作の初現を示す遺物として重要である。讃良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地上の集落が検出されている（後川・實盛・井上編 2015）。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点的集落である。前期では板付Ⅱ式併行期に属する大形壺の出土や（野島1984）、集落の検出がある（村上2001f）。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している（辻本1987、野島1987a、野島1994a、阿部1999）。焼失竪穴住居や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分銅形土製品や卜骨、銅鐸の舌や播磨地域の土器などが出土している（野島1994a、村上・實盛2011）。また2011年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、竪穴住居群や方形周溝墓などが検出され（野島1987a、阿部1999）、丹後・近江・出雲・山陰地域系の土器類などを含む多くの遺物が出土している（三好ほか2007）。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治44年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸２口が出土したと伝えられ（梅原1985）、現在関西大学が所蔵している。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が５基みつかっている（野島 1994b）。１号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が１基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。２号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。



第１図　周辺遺跡分布図

１．大上遺跡	２．岡山南遺跡	３．讃良川床遺跡	４．讃良寺跡
５．更良岡山古墳群	６．更良岡山遺跡	７．忍岡古墳	８．北口遺跡
９．讃良郡条里遺跡	10．奈良田遺跡	11．坪井遺跡	12．忍ヶ丘駅前遺跡
13．南山下遺跡	14．奈良井遺跡	15．鎌田遺跡	16．中野遺跡
17．墓ノ堂古墳	18．清滝古墳群	19．正法寺跡	20．国中神社内遺跡
21．四條畷小学校内遺跡	22．木間池北方遺跡	23．南野米崎遺跡	24．城遺跡
25．雁屋遺跡	26．伝和田賢秀墓	27．南野遺跡	28．近世墓地

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が（野島 1994c）、蔀屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が（岩瀬編 2012）、中野遺跡で後期の遺構が検出されている（野島 1986b）。

古墳時代　讃良川流域で古墳時代前期中頃に全長約 87mの前方後円墳である忍岡古墳が築造されている（梅原 1937）。主体部は竪穴式石室（石槨）で、碧玉製の石釧・鍬形石・紡錘車、鉄剣、鉄鎌、小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴うとみられる前期の集落は、讃良郡条里遺跡で微高地上の集落が検出されている（井上編 2008、近藤ほか編 2006、佐伯ほか編 2007、後川・實盛・井上編 2015）。また岡山南遺跡でも集落を検出している（村上・實盛 2016）。

中期の古墳としては、全長約62mの前方後円墳である墓ノ堂古墳があり、立会調査で円筒埴輪片が出土している（野島1997c、櫻井・佐野・野島2006）。忍ヶ丘駅前１号墳では琴を弾く男性埴輪が出土している（野島1993a、1997a）。清滝古墳群（野島1980a）や大上古墳群、更良岡山古墳群（野島1981）などは中期から後期まで続く馬飼い集団の墓域とみられる。中でも城遺跡内の大上３号墳は周溝を含めた全長が約45mある後期の帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と墳丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した（村上2006）。清滝古墳群２号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた（野島1980a）。大上５号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盗掘されていたが、金銅装中空耳環が１点出土した（野島1999、四條畷市教育委員会編2002）。

ＪＲ忍ケ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪（櫻井・佐野・野島 2006、2010 等）、南山下遺跡で馬形埴輪（野島 1987c、d）、岡山南遺跡で家形埴輪が出土していて（野島 1982）、一緒に左足用の木製下駄も出土している（野島 1979、1982、瀬川 1992）。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われていて、奈良田遺跡（野島 1980c、野島・村上 2000）、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡（村上 2000 等）、城遺跡・大上遺跡（村上 2006）、南野米崎遺跡（野島 1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編 2004）などの集落遺跡で馬骨・馬歯をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓式系土器等が数多く出土している。讃良郡条里遺跡で５世紀初頭の馬骨の出土がみられ（中尾ほか編 2009）、蔀屋北遺跡では馬具の鐙・ハミ・鞍や、井戸枠に再利用された準構造船、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる（岩瀬ほか編 2010、岩瀬編 2012）。鎌田遺跡では溝からスリザサラや木鏃、祭具を載せる台等の祭祀遺物が出土し（村上 2001c、d、e）、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している（野島 1980b、野島・村上 2000、野島・村上・實盛 2012）。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讃良郡条里遺跡では水田跡がみつかっている（野島 1993b、中尾ほか編 2009 等）。讃良郡条里遺跡の 2011 年度の調査では水路の堤防構築に敷葉を使った工法が用いられていた（後川・實盛・井上編 2015）。北口遺跡では緑色凝灰岩質の石核が出土し、中期に玉類の製作が行われたとみられる（村上・實盛 2014）。

古代以降　正法寺跡は、７世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である（大阪府教育委員会編 1970）。一方、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であった（村上 2001a）。ただし、中門は礎石建物で（野島・藤原・花田 1977）、塔は石積みの遺構を伴っていた（大阪府教育委員会編 1970）。また回廊の南西部分にあたると推定される位置の瓦だまりから創建時の鴟尾片が出土している（野島・村上 2002）。

讃良寺跡は 1969 年に部分的に調査されており、７世紀の創建であることが分かっている（桜井 1972、櫻井・佐野・野島 2006、2010）。正法寺跡のものと同笵の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しているが（野島編 2000）、文様に型起因の摩耗がみられ、讃良寺のものが後に作られたと考えられている（野島 1997b）。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡がみつかっている。正法寺近辺では河川跡の数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれていて、木間池北方遺跡で円面硯や土器と共に土馬が７体出土した（村上2006）。木間池北方遺跡で「□万呂」（村上2006）、南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出

土している(野島1995)。讃良郡条里遺跡では小型海獣葡萄鏡が出土しており、有力者が祭祀に用いたとみられる（後川・實盛・井上編2015）。また、讃良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割施行例として注目される(中尾・山根編2009)。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡、讃良郡条里遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡（村上 2000)、木間池北方遺跡（村上 2006)、蔀屋北遺跡(岩瀬ほか編 2010)などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書された土師器坏や（村上 2006)、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書曲物井戸枠が出土している(村上 2003)。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されていて(野島・藤原・花田 1976、野島 1987b)、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書土器が出土している(野島 1987a)。讃良郡条里遺跡では皇朝十二銭を用いた溝内祭祀跡を検出している（後川・實盛・井上編 2015）。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡（村上 2003a)、南山下遺跡（野島・村上 2001、村上 2001b)、岡山南遺跡（野島・藤原・花田 1976、野島 1982、野島・前田 1984、野島 1987b、村上 2004、村上・實盛 2013a)、中野遺跡(野島 1977、1986b、西尾 1987)、忍ケ丘駅前遺跡(野島 1983、村上 1997b)、四條畷小学校内遺跡（村上 2000)、大上遺跡（村上 2006）木間池北方遺跡（村上 1997a)、南野遺跡(野島 1995)、蔀屋北遺跡(岩瀬ほか編 2010)、讃良郡条里遺跡（後川・實盛・井上編 2015）、南野米崎遺跡、楠公遺跡、蔀屋遺跡等で集落跡等がみつかっている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工房の跡とそれに伴う土壙墓がみつかっていて(野島 1996a、b)、工房跡では鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷付近では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一部を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛城跡はこれまでに大東市教育委員会によって調査が行われ、土塁や柵の跡が検出されている(黒田 1989)。平成 23 年度には城跡の詳細な縄張図が測量・作成されている(村上・實盛編 2013、黒田 2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013)。

室町時代後期の 16 世紀中頃に讃良郡条里遺跡内の大将軍社が創建され、明治 44 年に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めた。発掘調査では御正躰あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量の灯明皿が出土し、文献に記録されていた「百灯明」の祭りの存在が裏付けられている（後川・實盛・井上編 2015)。

（實盛良彦）

第２章　大上遺跡（ＯＧ2013－１・２）調査の経過

第１節　既往の調査

１．遺跡の概要と発見

大上遺跡は四條畷市大字清瀧に所在し、東西約 210m・南北約 160mの範囲が、古墳と、古墳時代・奈良時代・平安時代・中世の集落跡として周知されている。大上遺跡は、生駒山系の西側斜面において、西流する清滝川の南岸に立地する。

この遺跡は 1980 年に宅地開発にともなって試掘調査を行ない、古墳時代の土器片が数点出土して発見された（野島 1992）。その開発工事では盛土により遺構が保存されたため、発掘調査は行なわれなかった。

２．1992-1 次調査（大上１号墳。野島 1992・四條畷市史編さん委員会編 2016）

最初の調査は 1992 年に関西セルラー電話株式会社（現 KDDI 株式会社）による通信基地局・無線鉄塔設置にともなって行なわれた。同年５月 11 日に無線鉄塔予定地で確認調査を行ない、古墳時代後期の須恵器坏蓋・坏身・円筒埴輪片等が多数出土したため、無線鉄塔・通信機器局舎・進入口など計 350 ㎡の全面発掘調査を同年７月 29 日から９月 19 日まで行なった。調査地区は小字名「アマヅカ（尼塚）」が残る標高 33mの水田地で、平安時代と古墳時代の２時期の遺構を検出した。平安時代の遺構としては、直径 30～50㎝ の柱穴 23 基と直径 1.5mの土坑１基を検出した。柱穴は掘立柱建物を構成するとみられている。土坑内から 10 世紀中頃の須恵器瓶子・甕、土師器高坏・碗が出土した。

古墳時代の遺構としては、直径 19.4mと推定される円墳の東側半分を検出した（大上１号墳・第２図）。墳丘部は上層遺構のある平安期に削平されていて、墳丘内に埋葬施設は確認されなかった。幅４mの周溝を検出し、墳丘裾部では葺石が検出された。周溝内からは須恵器瑞・高坏・蓋坏・甕、土師器甕、手捏ね土器、鉄製刀子、馬具（バックル）、ガラス小玉 17 点、土玉 30 点、馬歯などが出土した。これらの出土遺物から、古墳時代後期の古墳とみられる。また、周溝内で埋葬施設２基を検出した。

１号埋葬施設は長さ 2.75m、幅 1.2m、深さ 0.6mの長方形で石に囲われていた（第２図）。埋葬施設内では頭蓋骨・肩甲骨・上腕骨・大腿骨・膝蓋骨・歯など一体分の人骨を検出し、その被葬者の耳付近にあたる位置から金製耳環一対が出土した。また、棺内にあたるとみられる位置から土玉 230 点、鉄製刀子２本、鉄鏃６本が、棺外にあたると思われる位置から土師器壺、須恵器蓋坏が出土した。

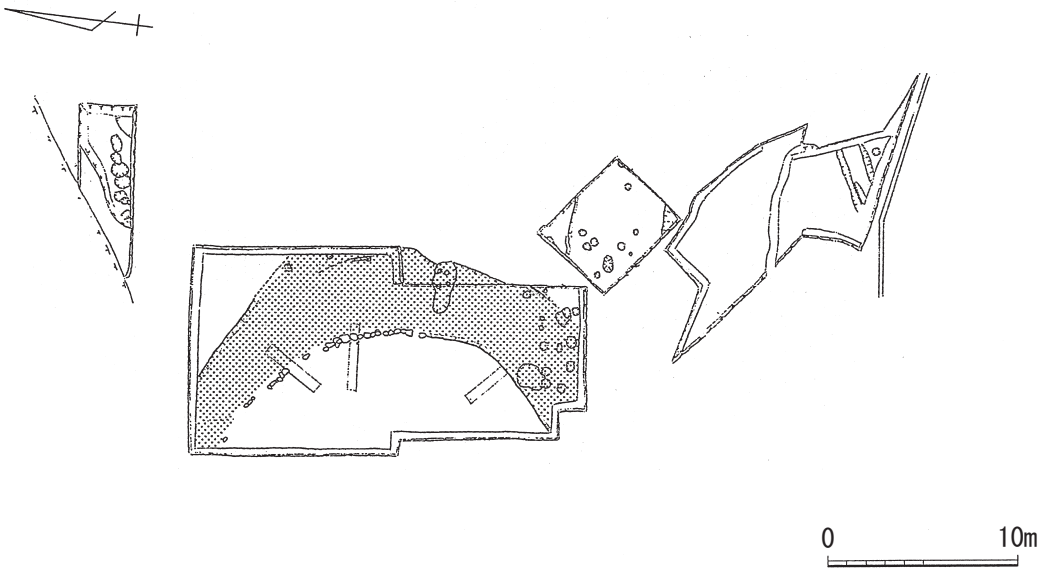
２号埋葬施設は１号の北側約 10mの位置で検出し、長さ 1.4m、幅 0.7m、深さ 0.3mで、人頭大と拳大の花崗岩で長方形に囲われていた。その石組み内から人歯とともに碧玉製管玉１点、ガラス小玉 19 点、土玉 30 点、馬歯などが出土した。

３．1992-2 次調査（大上２号墳。四條畷市史編さん委員会編 2016）

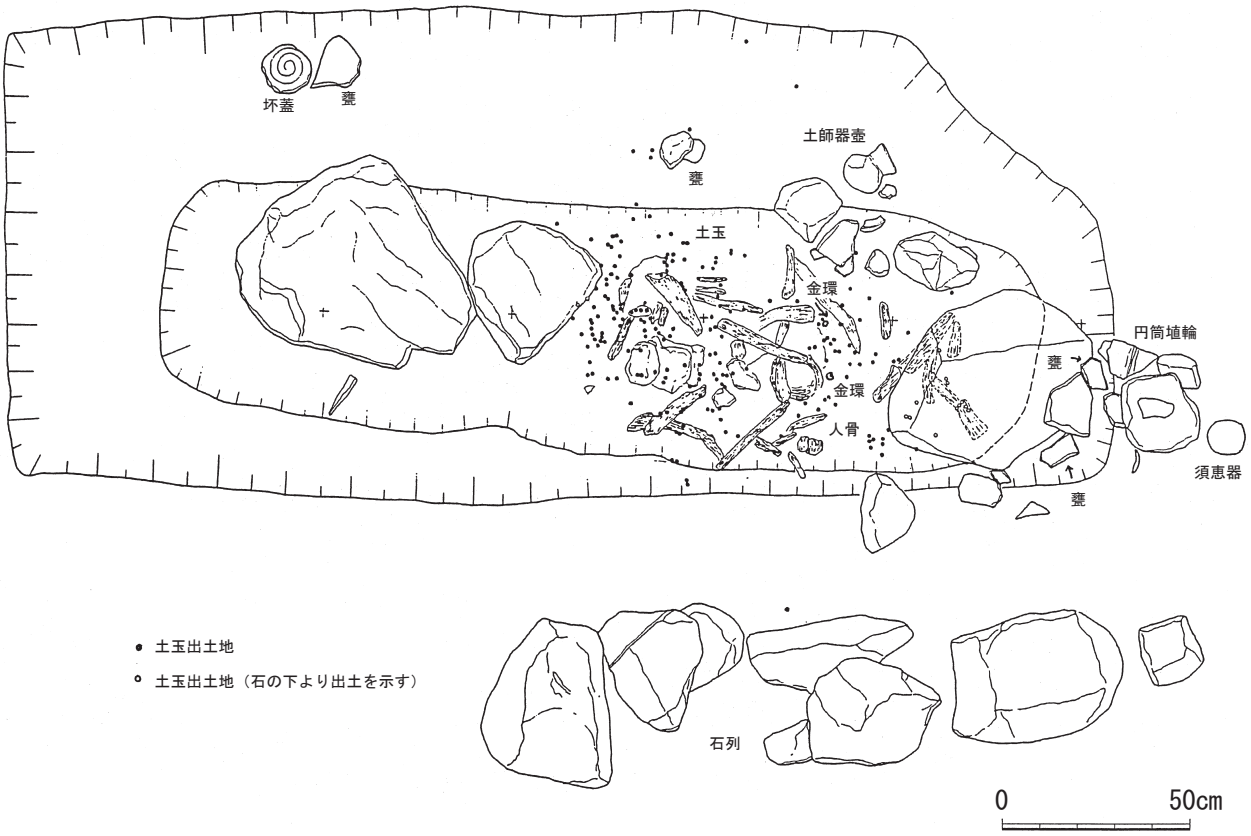
1992 年 12 月には、標高 37.8mの畑地でマンション建設に伴い進入路拡張部分 105 ㎡の調査を行なった（第３図）。この調査で幅約２m、深さ約 0.5mの溝（周溝Ａ）を検出し、溝内から円筒埴輪、鳥形瑞、土師器碗、馬歯などが出土した。円筒埴輪は５個体以上が出土し、出土状況から検出した溝は古墳の周溝で、墳丘上に立て並べられていた円筒埴輪が転落したものとみられる。出土した円筒埴輪は高さ 45～52㎝、口径 26～27.5㎝ あり、矢印状のヘラ記号があった。また、この溝から 2.5m離れた位置にも幅約 1.5m、深さ約 0.3mで同方向の溝（周溝Ｂ）があり、内部から円筒埴輪が出土した。いずれの溝も同一方向に若干弧を描いており、二重周溝の可能性も考えられるが、調査範囲が狭く古墳の墳形は不明である。出土遺物から古墳時代後期の古墳とみられる。

４．1993-1・1994-1 次調査（大上９号墳）

1993 年度と 1994 年度には、一連の宅地開発にともない道路部分の調査を相次いで行なった。その

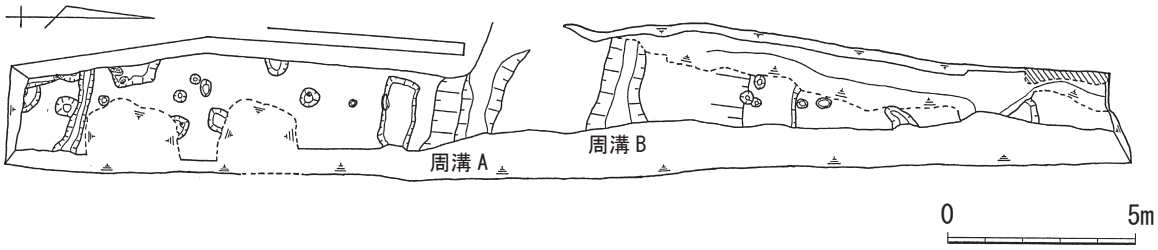


1992-1 次調査平面図（村上 2006 より）

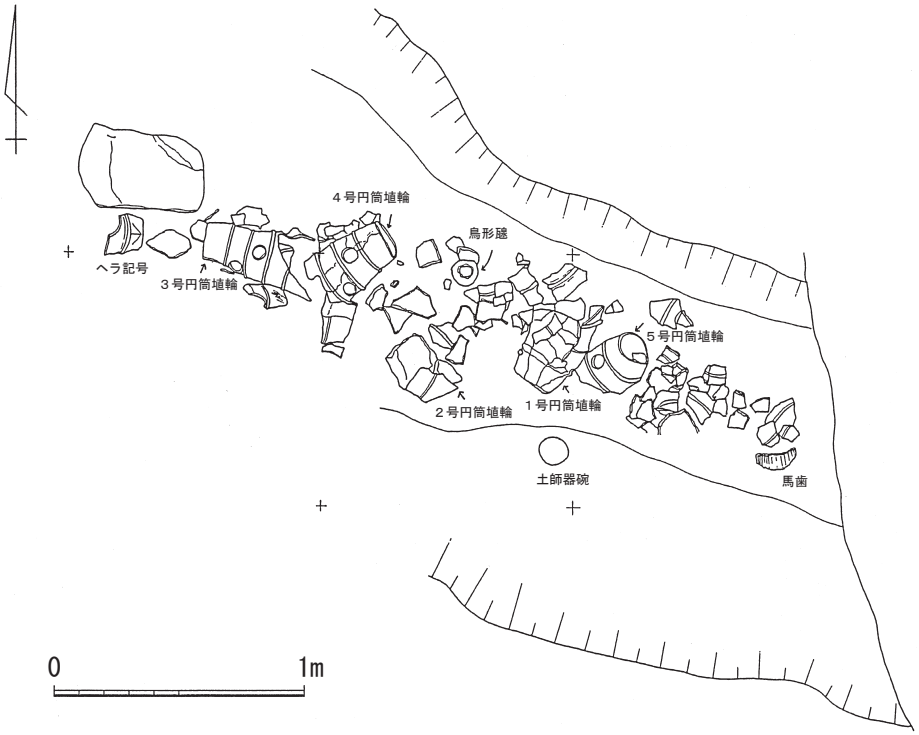


1 号埋葬施設検出状況

第２図　1992-1 次調査（大上１号墳）平面図と１号埋葬施設

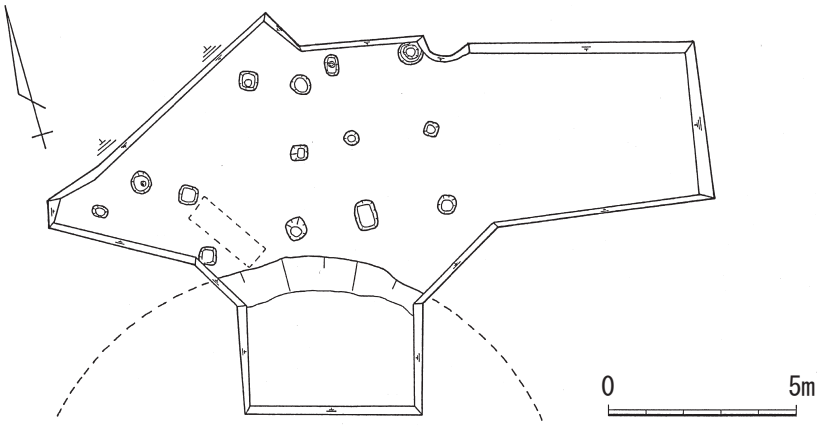


1992-2 次調査平面図

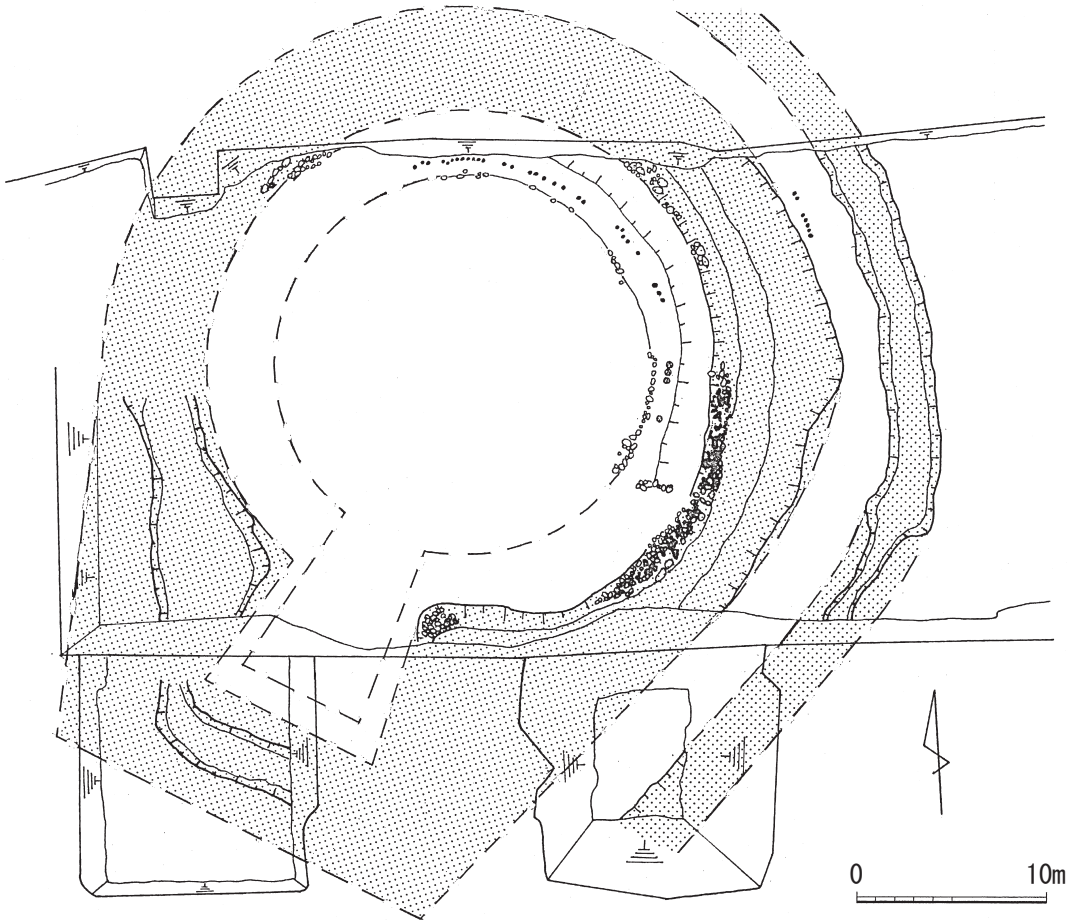


周溝Ａ内遺物出土状況

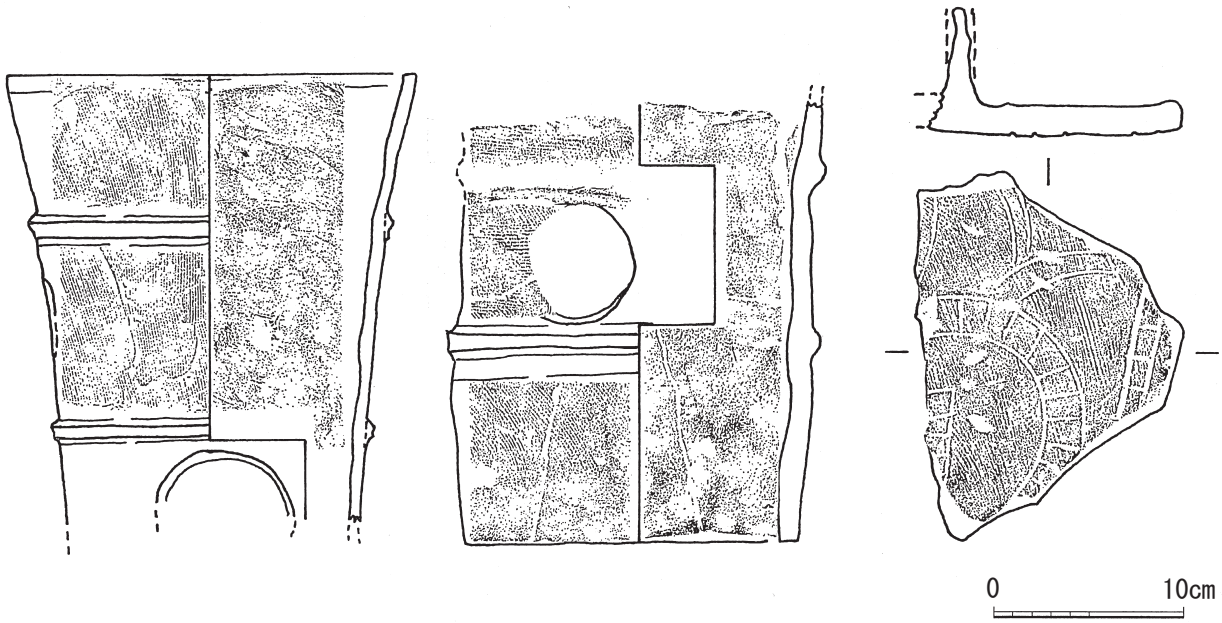
第３図　1992-2 次調査（大上２号墳）平面図と遺物出土状況



第４図　1994-1 次調査（大上９号墳）平面図



大上３号墳平面図



大上３号墳出土遺物（村上 2006 より）

第５図　大上３号墳平面図と出土遺物

うち 1994 年度の調査では、掘立柱建物と古墳の周溝の一部を検出した。周溝は北側肩のみの検出で、墳丘部である南側肩は調査区外であったため詳細は不明であるが、周溝の径は 14.2mほどに復元できる。おそらく円墳で墳丘の直径はおよそ 10mほどであろう（第４図）。

５．1996-1・1997-1 次調査（村上 2006）

1996 年と 1997 年には、国道 163 号建設に伴い調査を行なった。1996 年度の調査では旧河川の右岸肩部を検出した。1997 年度の調査では平安時代（10 世紀前半）の集落を検出した。この集落では方形板枠と曲物を組み合わせた井戸を検出し、内部から土師器碗と竹製の籠と思われる遺物が出土した。

６．大上３号墳の調査（村上 2006）

1997 年には隣接する城遺跡でも国道 163 号建設に伴い調査を行なった。この調査で円筒埴輪と葺石を伴う古墳を確認した。これが大上３号墳である。同年から 2003 年にかけての調査の結果、墳長約 37.5m、周溝を含めた全長約 45m、後円部の直径約 28.6m、前方部長約９ｍの帆立貝形古墳であることを確認した（第５図）。墳丘は二段築成で、花崗岩の自然石を用いた葺石と、円筒埴輪を伴っていた。周溝内からは円筒埴輪、形象埴輪のほか、須恵器等が出土した。墳丘残存部に主体部は検出できなかった。二段目まで残存しながら主体部が検出できなかったため、横穴系ではなく木棺直葬等も含めた竪穴系の主体部であった可能性がある。

円筒埴輪は立て並べられた位置を保っていた底部片が多くあり、基本的におよそ 10cm 間隔で立て並べられていたことがわかった。出土した埴輪には円筒埴輪のほか、蓋形埴輪や靫形埴輪などがあった。円筒埴輪はタテハケ調整のみのものが多いが、一部にヨコハケを施しているものも存在する（第５図）。出土埴輪から、川西分類（川西 1978）Ⅳ群からⅤ群に移行する古墳時代後期初頭に築造された古墳とみられる。

７．1998-1・3 次調査（大上 10 号墳。野島・村上 1999）

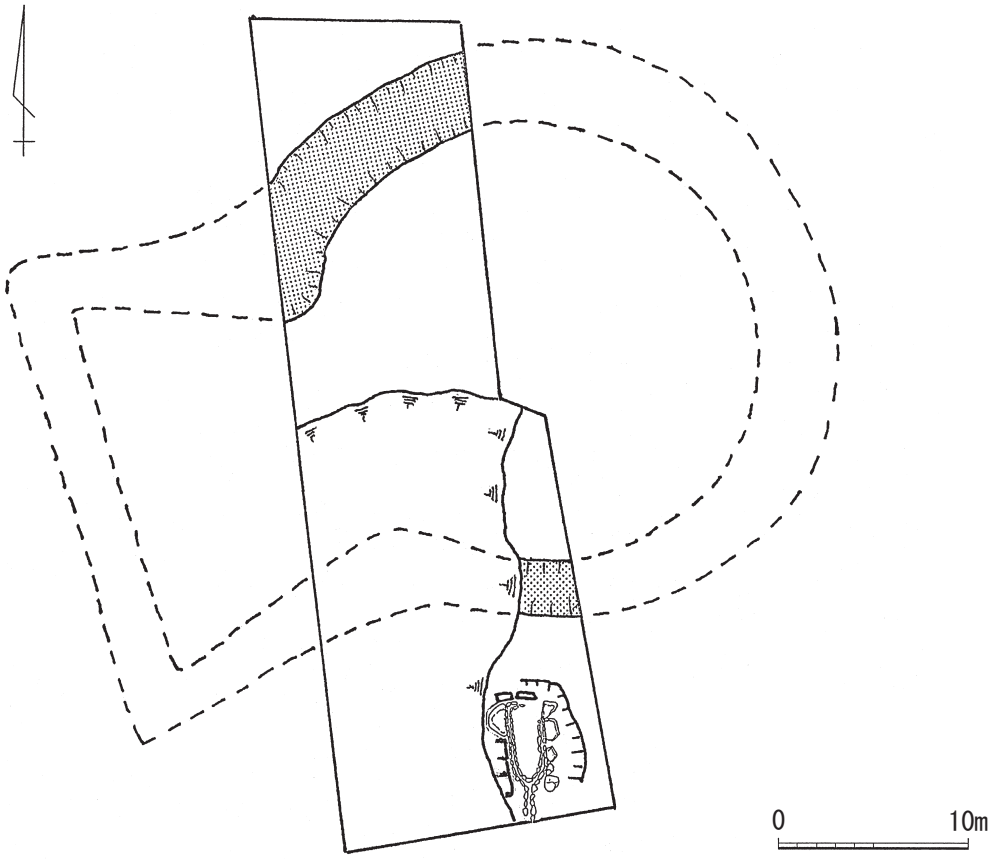
1998 年度に個人住宅の擁壁工事に伴い２次にわたって調査を行なっている。この調査では、古墳の周溝とみられる幅３ｍを超える溝を検出した。この溝からは鉄刀や刀子などが出土した。調査範囲が狭く古墳の墳形は不明である。調査地区の東側には古墳時代の柱穴群が存在していた。柱穴からは土師器・須恵器のほか馬歯が出土したものもあった。また、同一遺構面で縄文時代の土坑・Pit を検出し、後期の土器や石器が出土した。

８．1998-2 次・1999-1 次調査（大上４・５・11 号墳。野島 1999、四條畷市史編さん委員会編 2016）

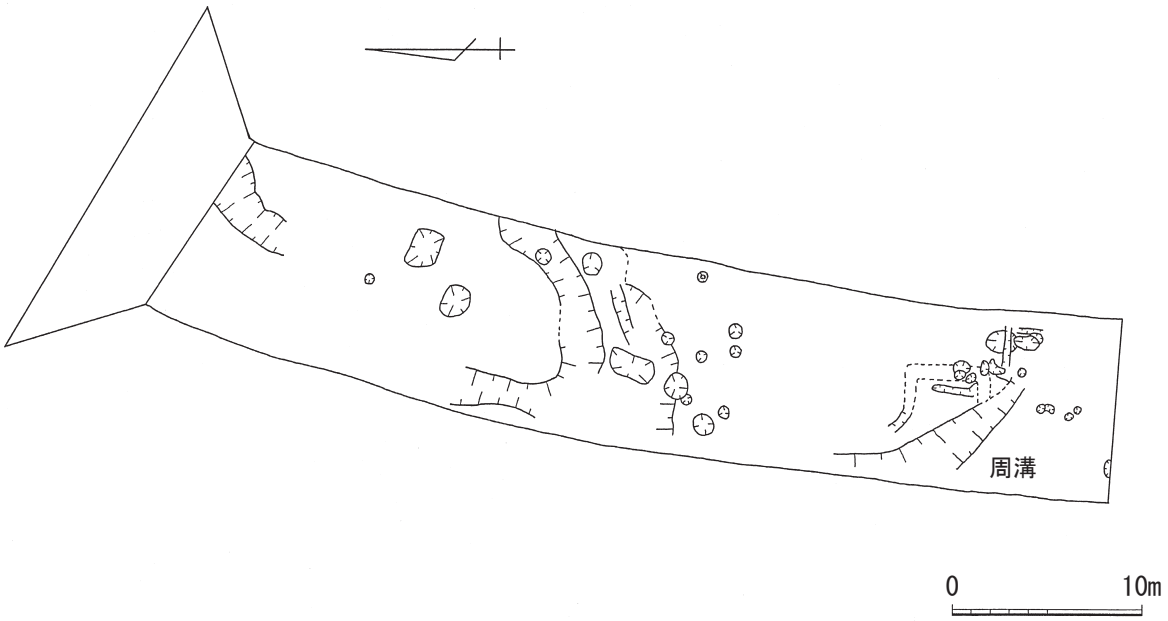
1999 年１月から３月と同年５月に、市道清滝中町１号線建設に伴い２次にわたって調査を行なった。1998 年度の調査では、前方後円墳（大上４号墳）と、墳形は不明だが横穴式石室（大上５号墳）を検出した。大上４号墳は検出できた周溝の幅５ｍで、くびれ部を確認できたことから前方後円墳であることが判明した。墳丘は削平されていたが後円部径は 24mあり、全長約 40mと推定される（第６図）。周溝内から、落ち込んだ花崗岩質の葺石や土器類、滑石製臼玉などが出土した。土器類のうち、北側周溝で出土した１点はほぼ完形に復元できる陶質土器壺で、大上３号墳の周溝から出土した土器片と接合した。出土遺物から古墳時代中期末の古墳とみられる。

大上５号墳は墳形不明だが横穴式石室を検出したもので（第６図）、左側壁４石、右側壁１石が原位置を保っており、玄室の幅 1.7m、長さ 3.7mあった。羨道部は破壊されていたが、全長は６ｍほどの石室と考えられる。左側羨道で検出した１石は袖部のもので、左片袖もしくは両袖式とみられ（野島 1999）、発掘時の状況から両袖式と考えられている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。石室内の床面周囲には石組みの排水施設を備え、奥には石敷きの棺床が設けられていた。棺床の位置で鉄釘２本が出土し、木棺を用いたとみられる。副葬品は金銅装中空耳環１、青色ガラス小玉１、緑色凝灰岩質管玉１などがあった。石室内から瓦器碗、土師質土器皿、瓦質羽釜、白磁碗などが出土し、鎌倉時代に盗掘されたとみられる。出土遺物から古墳時代後期の古墳であろう。

同じ調査では、第６図に図示していないが４号墳周溝と５号墳の間で検出した落ち込み（溝）から



1998-2 次調査（大上４・５号墳、村上 2006 より）



1999-１次調査（大上 11 号墳）

第６図　1998-2 次調査（大上４・５号墳）・1999-1 次調査（大上 11 号墳）平面図

奈良時代の八角柱高坏（高さ 20.2cm）などが出土している。

1999-1 次調査では 1998-2 次調査の北側で調査を行なった。この調査では古墳周溝とみられる溝を検出し、周溝内から多量の土器が出土した。そのほとんどは須恵器であり、台付装飾壺、盌、高坏などをはじめ多様な器種があった。古墳の墳形は不明であるが、円墳であるとすれば直径 27m程度に復元できる。出土遺物から古墳時代後期の古墳とみられる。

この調査では、1998-1・3 次調査と同様縄文時代の遺物の出土もあった。上記の周溝内からは石鏃や磨製石斧等が出土しており、別の溝からは後期～晩期の土器が多く出土した。

第２節　ＯＧ2013－１調査の経過

平成 25 年度第１次の発掘調査（ＯＧ2013－１）については、四條畷市大字清瀧 497 番 16、503 番において宅地造成・集合住宅建設工事が計画され、平成 25（2013）年 11 月５日に南畑嘉明氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第 93 条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは同年 11 月 25 日付け教委文第 1-4155 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成 25 年 12 月 24 日に、計画用地内に２か所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、中世と古墳時代の包含層および遺構面を確認した。その結果をもって協議を行ない、遺跡が工事によって破壊される西側及び南側擁壁部分の発掘調査を実施することとなった。同年 12 月 27 日付で発掘調査承諾書の提出があり、平成 26（2014）年１月７日付畷教社第 1300 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行なった。調査面積は約 52 ㎡で、調査期間は平成 26 年１月 14 日から 24 日までであった。調査は確認調査の結果から、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行なった。

調査で出土した遺物については、平成 26 年１月 27 日付畷教社第 1371 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年１月 29 日に第 4827 号で受理された。大阪府教育委員会には同年１月 27 日付畷教社第 1372 号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年３月３日付教委文第３－298 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計 10 箱であった。

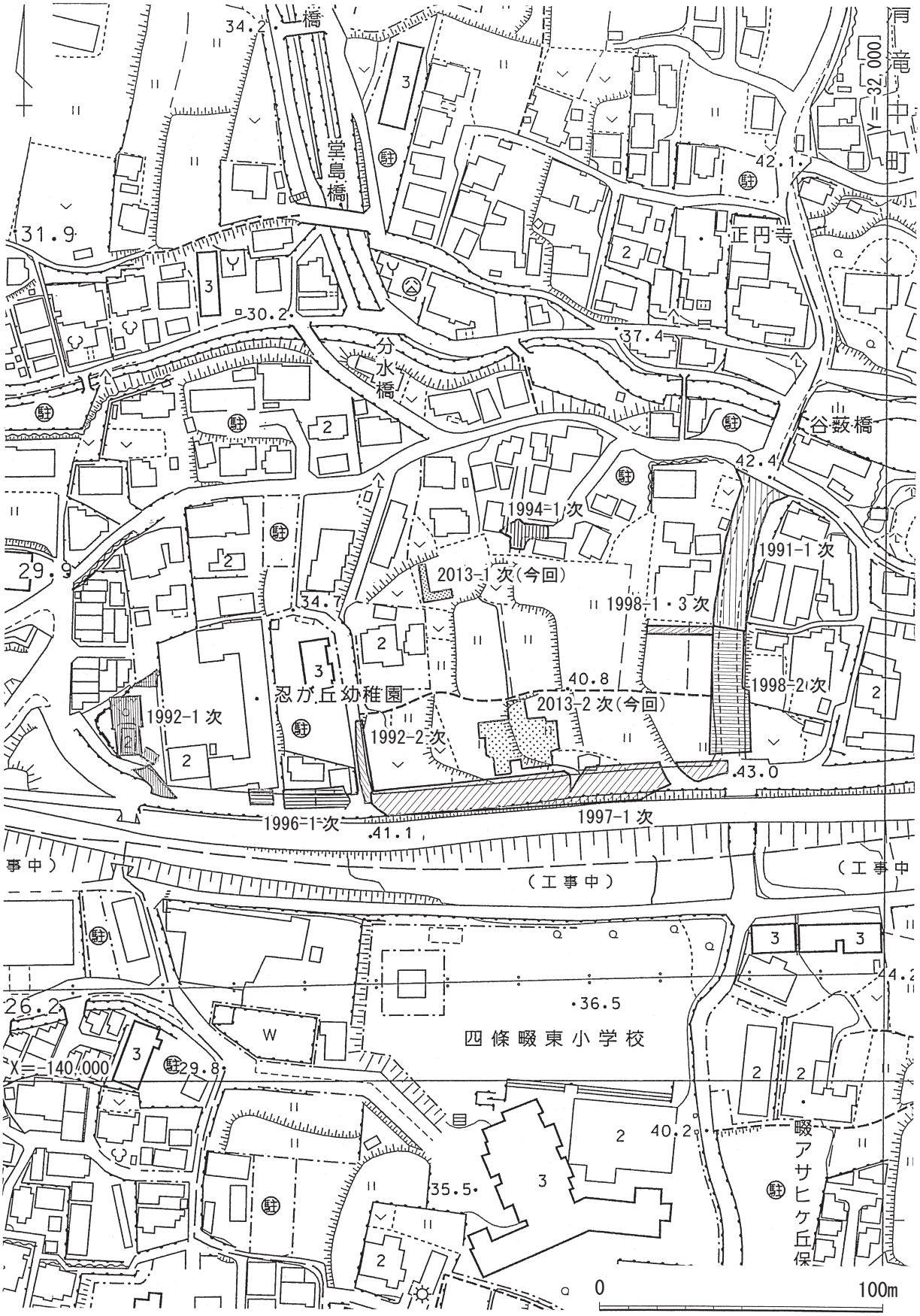
第３節　ＯＧ2013－２調査の経過

平成 25 年度第２次の発掘調査（ＯＧ2013－２）については、四條畷市大字清瀧 512 番１ほか３筆において老人福祉施設建設工事が計画され、平成 26（2014）年１月 10 日に社会福祉法人山麓会から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第 93 条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは同年２月４日付け教委文第 1-5321 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成 26 年１月 22 日に、計画用地内に３か所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、中世と古墳時代の包含層および古墳周溝と思われる遺構、遺構面を確認した。その結果をもって協議を行ない、遺跡が工事によって破壊される建物建設予定地の発掘調査を実施することとなった。同年２月 12 日付で発掘調査承諾書の提出があり、同年２月 17 日付畷教社第 1457 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行なった。調査面積は約 530 ㎡で、調査期間は平成 26 年２月 24 日から４月 21 日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行なった。

調査で出土した遺物については、平成 26 年４月 22 日付畷教地第 120 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年４月 25 日に第 426 号で受理された。大阪府教育委員会には同年４月 22 日付畷教地第 121 号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年８月 19 日付教委文第３－88 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計 10 箱であった。

（實盛）


34.2
堂島橋
31.9
30.2
分水橋
37.4
正円寺
42.1
谷藪橋
42.4
1994-1次
1991-1次
29.9
2013-1次(今回)
34.7
1998-1・3次
40.8
1998-2次
忍が丘幼稚園
2013-2次(今回)
1992-1次
1992-2次
43.0
1996-1次
41.1
1997-1次
(工事中)
(工事中)
26.2
36.5
四條畷東小学校
X=-140,000
29.8
40.2
35.5
畷アサヒケ丘保
0
100m

第７図　調査地区位置図

第３章　大上遺跡（ＯＧ2013－１）調査の成果

第１節　基本層序

今回の発掘調査地区の調査前現況は畑地であった。調査前にその畑地に 0.4mほど盛土されていた。その下層に約 0.2mの畑地耕土と 0.1mの床土があり、畑地以前は水田であったと思われる。その下層には部分的に 0.1mほど中世の包含層が堆積し、その下層は古墳時代の包含層が 0.1m堆積していた。その下層の浅黄色砂質土が地山であり、その直上が古墳時代の遺構面であった。なお、この調査では古墳を検出したが、古墳の墳丘部分については現代耕土を取り除いた時点で床土・包含層もなくすぐに地山を検出した。

以下、各土層の説明を述べる。

■調査地区断面（第９図）

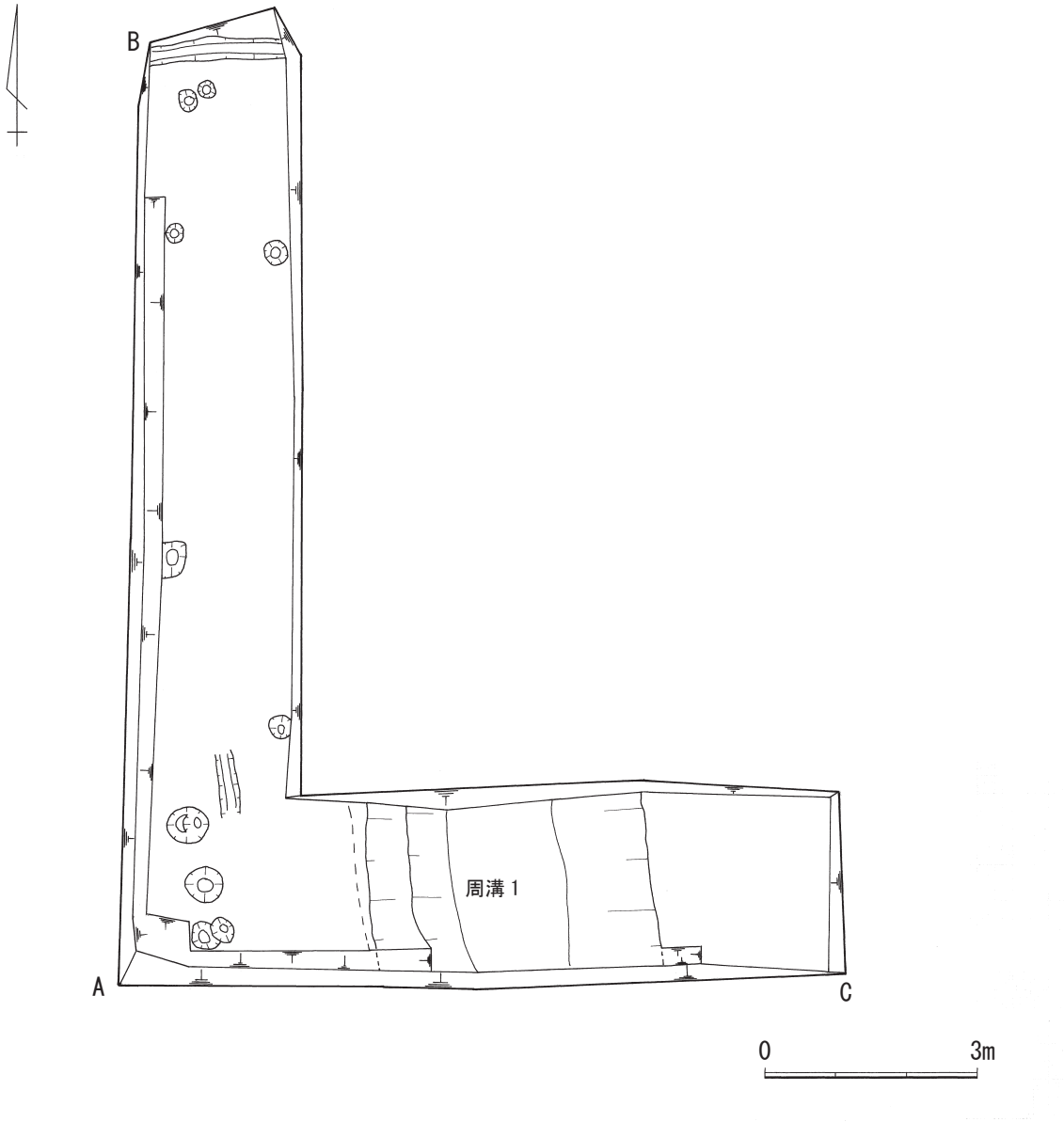
1　現代盛土　（調査前の盛土）
2　現代盛土　（耕作時の盛土）
3　現代耕土
4　床土
5　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2　中世包含層
6　灰褐色砂質土　7.5YR 4/2　径１㎝以下の礫を含む　黒色物質（灰？）を含む　中世包含層
7　褐灰色砂質土　10YR 5/1　黒褐色（10YR 3/1）の鉱物を多量に含む　古墳時代包含層
8　褐灰色砂質土　10YR 4/1　下層は若干粘性が強い　周溝１埋土
9　黄灰色砂質土　2.5Y 4/1　古墳時代包含層
10　褐色砂質土　7.5YR 4/3　径２㎝以下の礫を多く含む　溝 13 埋土
11　黄灰色砂質土　2.5Y 4/1　遺構埋土
12　浅黄色砂質土　2.5Y 7/4　花崗岩粒を多量に含む　９層がブロック状に混じる　地山
13　浅黄色砂質土　2.5Y 7/4　花崗岩粒を多量に含む　しまりが強い　地山（古墳内）

（實盛）

第２節　検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、すべて古墳時代の遺構で、古墳の周溝１基、土坑 10 基、溝２基の合計 13 基の遺構があった（第８図）。遺構面の標高は北端で T.P.＋38.300m、南西端で T.P.＋38.498m、南東端で T.P.＋38.734mであった。遺物のほとんどは周溝１からの出土で、他の遺構からはわずか３基からごく少量の古墳時代遺物が出土しただけであった。大上古墳群では古墳が存在しない空間にはこのような土坑や柱穴等が存在することが多く、この調査でも同様の状況であった。調査範囲が狭いため建物等を復元することはできなかった。このため、遺物のほとんどが出土した周溝１について詳述する。なお遺構の番号は、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。

周溝１　調査地区の東半で検出した。南北方向の溝で、出土遺物の大半が埴輪であり、古墳の周溝の可能性が高い。形状はほぼ直線的であるが、検出範囲が狭いためこの周溝により構成される古墳の墳形は不明である。『四條畷市史』第五巻で、この古墳を「大上６号墳」と名付けている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。出土遺物は周溝内の東寄りにかたまって出土しており、この周溝より東側には遺構が検出されないことから、周溝より東側が墳丘部である可能性が高い。出土遺物のうち埴輪は、東側の墳丘部に立てられていたのが落ち込んだものであろう。葺石が転落したとみられる拳大～人頭大の花崗岩もいくつか検出した。周溝１の検出できた規模は長さ 2.4m、幅 4.0m、深さは北端部分で

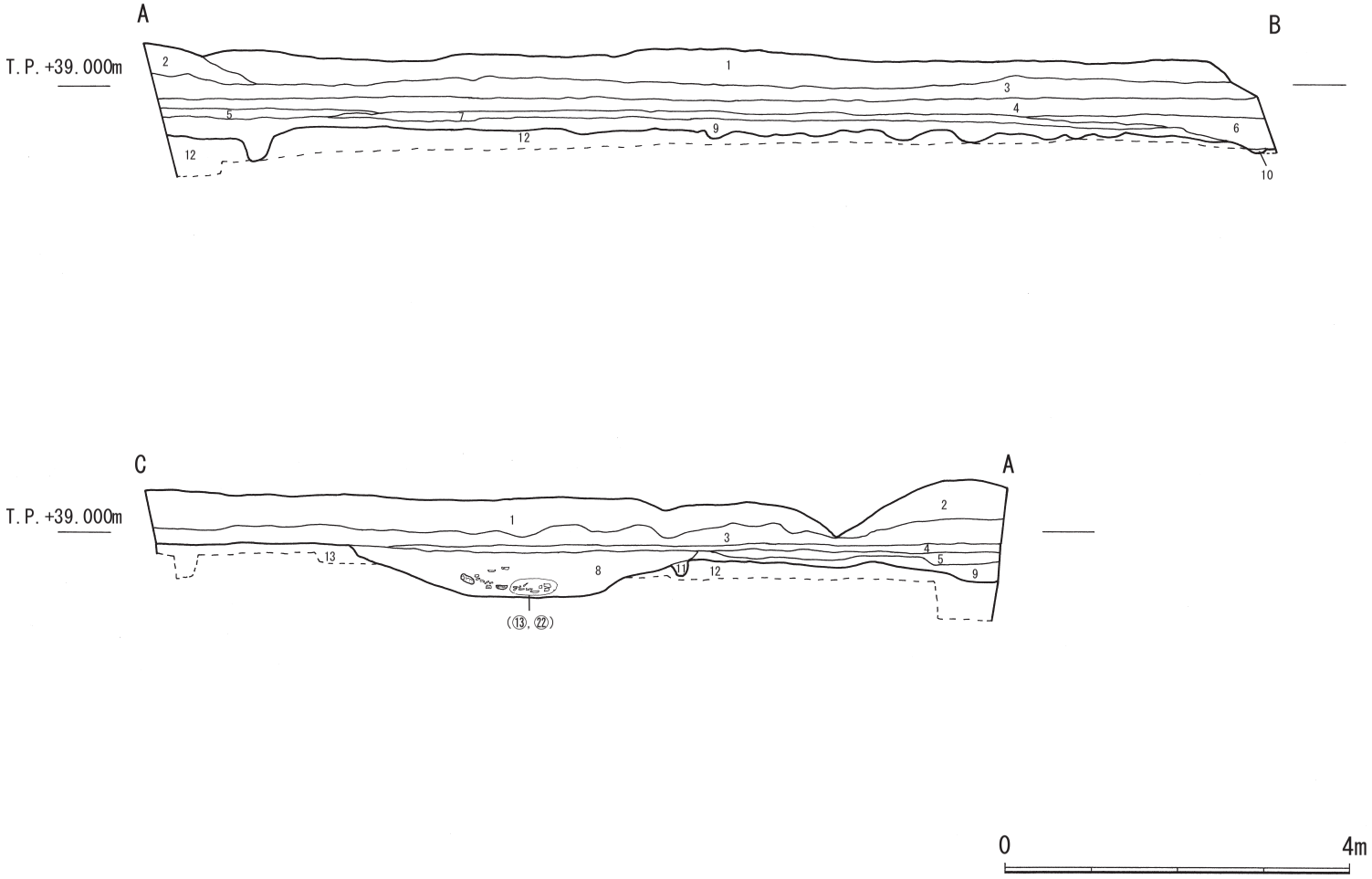


第８図　調査地区平面図（ＯＧ2013－１）

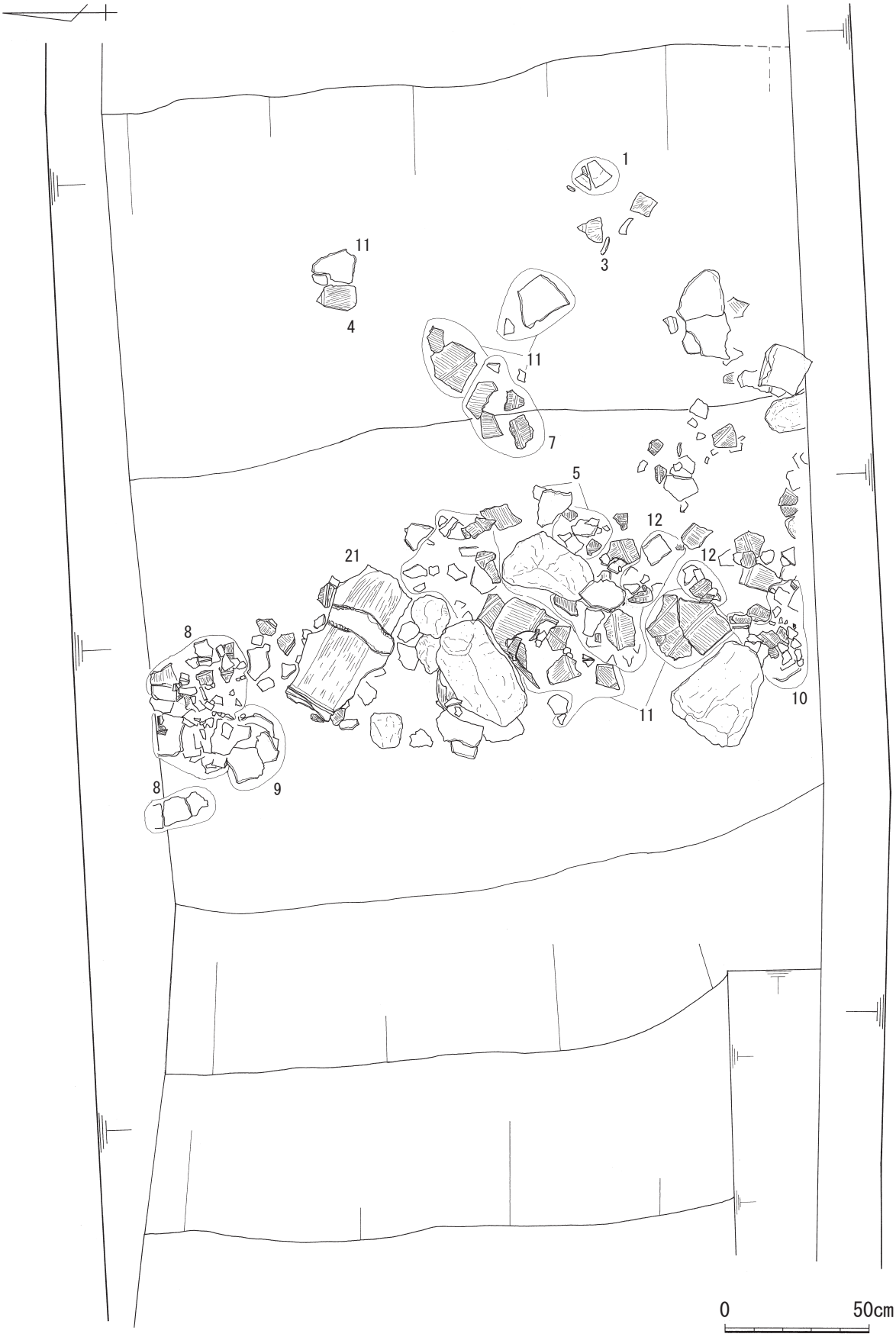
0.63m、南端部分で0.55mである。標高は北端部分の東（墳丘）側上端がT.P.＋38.758m、西側上端がT.P.＋38.721m、底部がT.P.＋38.128mで、南端部分の東（墳丘）側上端がT.P.＋38.783m、西側上端はT.P.＋38.693m、底部はT.P.＋38.233mであった（第８・10図・巻頭写真図版・写真図版１～３）。

出土遺物は、墳丘削平・周溝最終埋没の時期を示すとみられる黒色土器と、古墳に伴う埴輪、鉄製品、土師器、製塩土器、石製品、馬歯、動物骨があった（第11～15図）。これらの出土遺物から、周溝１により構成される大上６号墳は古墳時代後期前半の古墳とみられる。

（實盛）



第９図　調査地区断面図（ＯＧ2013−１）



第10図　周溝１遺物出土状況図（ＯＧ2013－１）

第３節　出土遺物

１．周溝１出土遺物

黒色土器

１Ａ類碗　口径：14.2 ㎝。底径：6.2 ㎝。器高：4.1 ㎝。厚さ：0.2～0.3 ㎝。色調：内面は黒色（N 2/）・外面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：密。直径１㎜以下の白色・赤色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁部は制作の際に若干歪んでおり、楕円形を呈する。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施している。内面と見込み部はヘラミガキ調整を施しているが不明瞭である。畿内系Ⅰ類に属するもので、９世紀代のものと思われる。周溝１の最上層から出土しており、大上６号墳の削平・周溝１の埋没年代を示す資料である。（第 10 図－１、第 11 図－１、写真図版８－１－１）

土師器

２甕　口径：13.8 ㎝（復元）。器高：7.5 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）、外面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の粒子や砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部外面はタテハケ調整後ヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。口縁部と体部の接合部内面の一部にヨコハケ調整痕が残存している。周溝１の最下層から出土。６世紀後半のものと思われる。（第 11 図－２、写真図版８－１－２）

鉄製品

３不明鉄製品　長さ：11.0 ㎝（残存）。幅：1.05 ㎝。厚さ：0.35 ㎝。形状は直線的で下部が曲がる。鉄鏃などの基部の可能性が考えられる。（第 10 図－３、第 11 図－３、写真図版９－１－３）

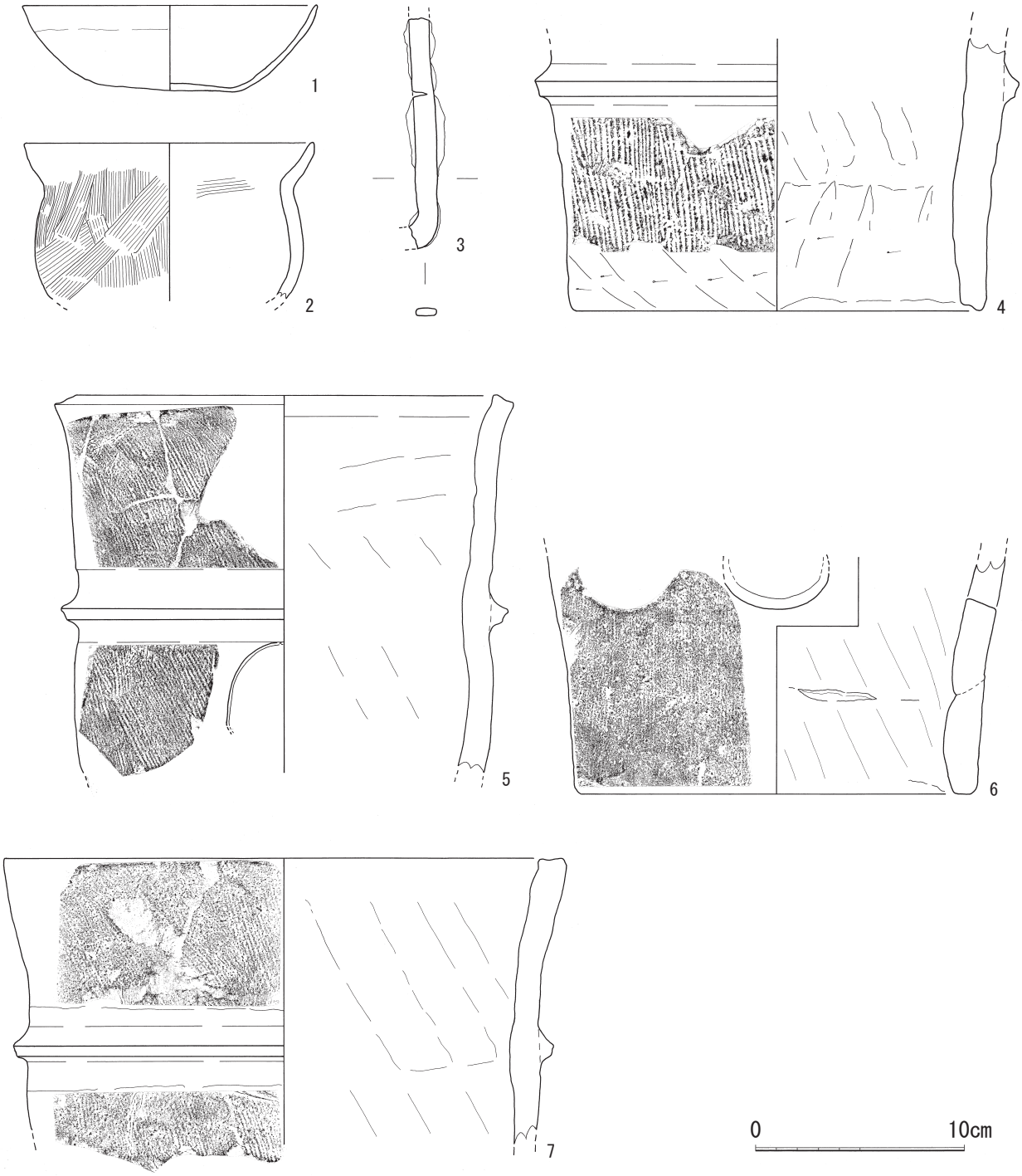
埴輪

４円筒埴輪　底径：19.4cm（復元）、器高：13.0cm（残存）。厚さ：1.1～1.9 ㎝。色調：内面は灰褐色（7.5YR 6/2）、外・断面は灰色（N 6/）。胎土：粗。直径３㎜以下の砂粒を多く含む。焼成：良好（須恵質）。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整が施されている。底部内外面は板状工具によりケズリ調整が施されている。突帯の高さは 0.7 ㎝で、ほぼ水平に巡らされていると思われる。突帯の上下は貼付後にヨコナデ調整を施している。（第 10 図－４、第 11 図－４、写真図版８－１－４）

５普通円筒埴輪　口径：20.0 ㎝（復元）。器高：18.0 ㎝（残存）。厚さ：1.0～1.3 ㎝。色調：内・外面は橙色（7.5YR 7/6）、断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや粗。直径３㎜ 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はヨコとタテ方向のユビナデ調整が施されている。口縁端部は内面側をつまみ上げるようにして整形している。突帯の高さは 0.8 ㎝で、ほぼ水平に巡らされていると思われる。突帯の上下は貼付後にヨコナデ調整を施している。（第 10 図－５、第 11 図－５、写真図版８－１－５）

６円筒埴輪　底径：18.8 ㎝（復元）。器高：11.3 ㎝（残存）。厚さ：1.7 ㎝。色調：内・外面は橙色（7.5YR 7/6）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：やや粗。直径３㎜ 以下の石英・長石・雲母・黒色粒子・赤色粒子を非常に多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整が施されている。円孔を最下段に開けており、形象埴輪の基底部の可能性がある。（第 11 図－６、写真図版８－１－６）

７普通円筒埴輪　口径：26.8 ㎝（復元）。器高：13.7 ㎝（残存）。厚さ：1.0～1.5 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/6）。胎土：粗。直径２㎜ 以下の砂粒を多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はヨコとタテ方向のユビナデ調整が施されている。突帯の高さは 0.7 ㎝で、ほぼ水平に巡らされていると思われる。突帯の上下は貼付後にヨコナデ調整を施している。

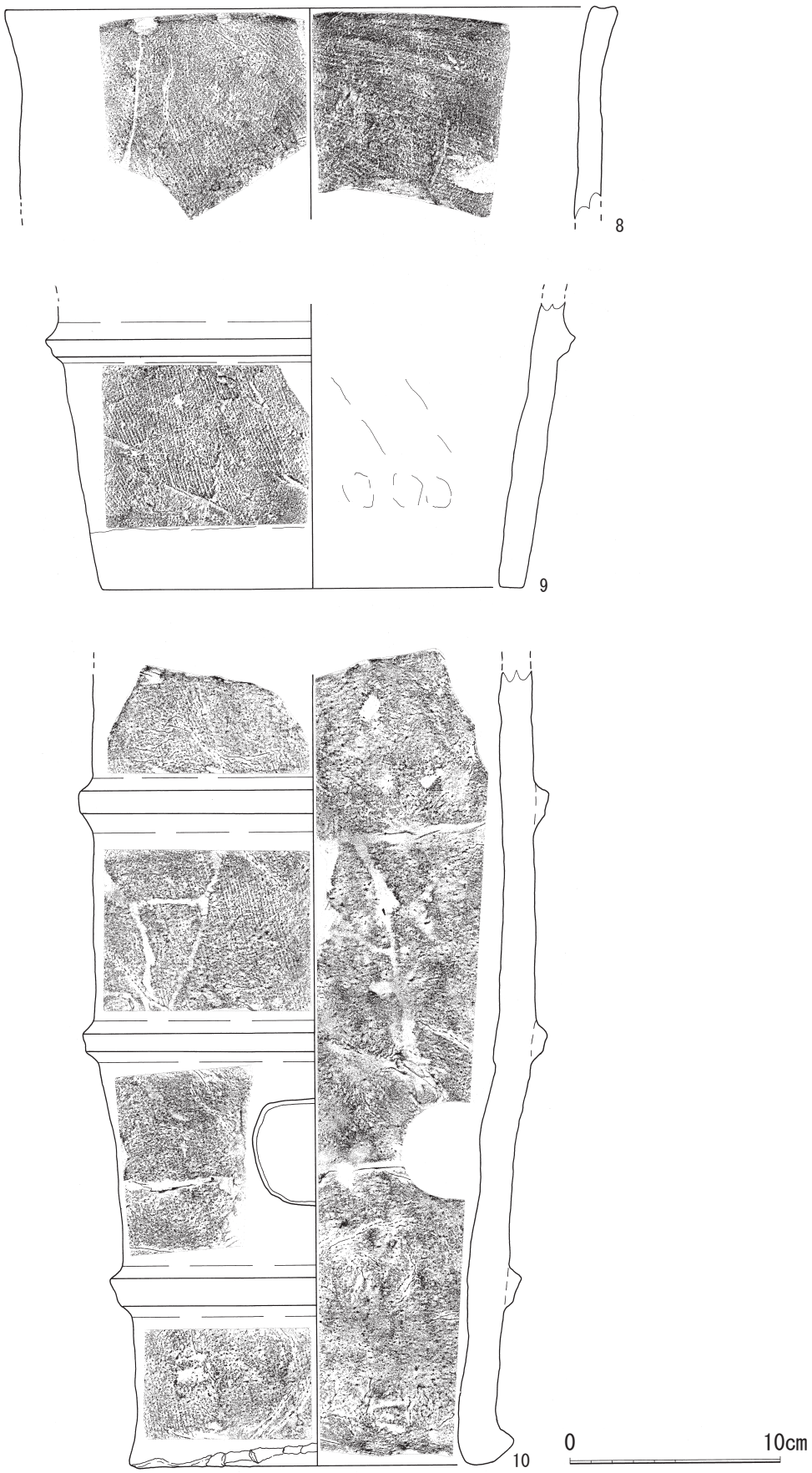


第 11 図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（１）

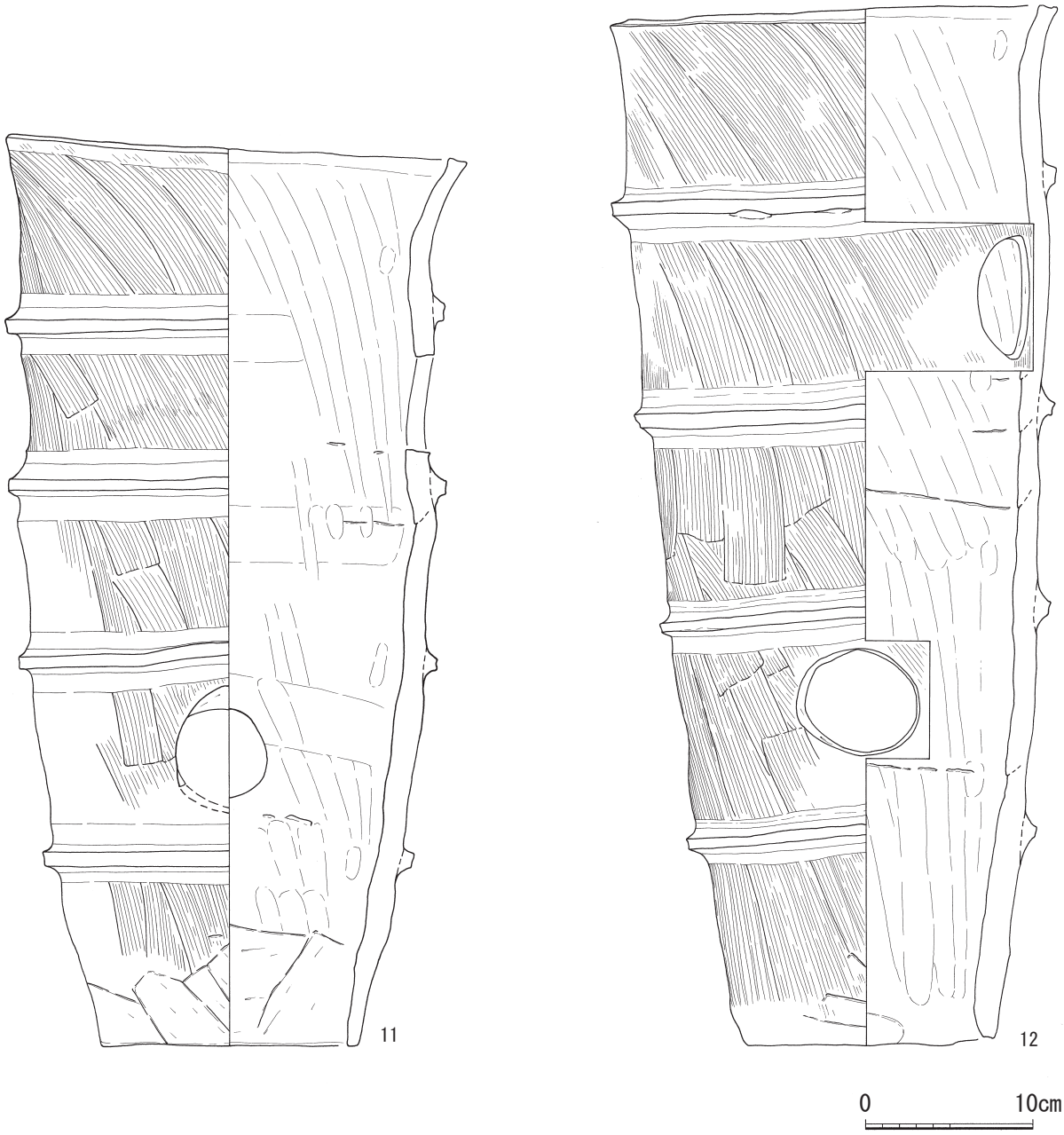
（第 10 図－７、第 11 図－７、写真図版８－１－７）

８普通円筒埴輪　口径：29.0 ㎝（復元）。器高：10.0 ㎝（残存）。厚さ：1.1～1.3 ㎝。色調：内・外・断面は橙色（5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径２㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整が施されている。（第 10 図－８、第 12 図－８、写真図版８－１－８）

９円筒埴輪　底径：20.0 ㎝（復元）。器高：13.5 ㎝（残存）。厚さ：1.2～1.5 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：粗。直径２㎜以下の砂粒を非常に多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整が施されている。底部外面はナデ調整が施されている。（第 10 図－９、第 12 図－９、写真図版８－１－９）



第 12 図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（２）



第13図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（３）

10円筒埴輪　底径：17.0㎝（復元）。器高：37.5㎝（残存）。厚さ：1.4～2.0㎝。色調：内・外・断面は黄橙色（7.5YR 7/8）。胎土：やや粗。直径２㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整が施されている。突帯の高さは0.7㎝でおおむね水平に巡らされている。その間隔は底部１段目から順に8.4cm、11.8cm、11.5cm程度を測る。底部外面は底までタテハケ調整を施し、底面の一部は重みのためか変形している。（第10図－10、第12図－10、写真図版８－１－10）　（村上　始・實盛）

普通円筒埴輪　完形に復元された個体は２点存在するが、いずれも４条５段構成で、底部から２段目と４段目に円形スカシを千鳥配置で穿つ。

11は、底部径15.4cm、口縁部径27.4cm、器高54.0cmを測る個体である。焼成は堅緻で、色調は橙（5YR 7/8）～灰色（10Y 5/1）を呈する。胎土は粗く、径2mm程度の砂粒を多く含む。調整は外

面がハケ、内面が指ナデにより行なわれる。また、底部付近には内外面ともケズリが行なわれるが、砂礫の動きから倒立状態でそれが行なわれたと判断できる。倒立状態で底部端部の内外面をケズリ調整するものとしては、奈良盆地を中心に類例があるが（坂 2006）、それとの関連は不明である。突帯はおおむね水平に巡らされており、その間隔は底部１段目から順に 11.4cm、12.0cm、10.4cm、9.6cm 程度、口縁部高は 10.4cm 程度を測る。また、突帯の突出度は高く、断続ナデ技法（鐘方・中島 1992）の採用は確認できない。（第 10 図－11、第 13 図－11、写真図版８－２－11）

12 は、底部径 14.8cm、口縁部径 26.6cm、器高 61.0cm を測る。焼成は良好で、色調は橙色（7.5YR 7/6）を呈する。胎土には径 2mm 程度の砂粒を多く含む。調整は外面がハケ、内面が指ナデにより行なわれる。底部外面には板状工具による底部調整の痕跡が確認できるが、部分によっては板オサエがやや甘く、底部内面の指オサエも明瞭ではない。口縁端部は内面側をつまみ上げるようにして整形するが、そのナデが及ばなかった箇所には平坦面が残されている。これは底部調整のために倒立した際の成形台の痕跡であろうか。突帯はやや波打つものの、おおむね水平に巡らされており、その間隔は底部１段目から順に 13.0cm、13.0cm、12.4cm、12.8cm 程度、口縁部高 11.0cm 程度である。突帯の上下には２単位のナデが確認できるため、突帯が貼付けと整形の２度の工程を経て整形されたことがわかる。突帯下部には爪圧痕が残されるが、断続ナデ技法の際の痕跡とは判断しえない。なお、内外面調整の不連続性から底部３段目で小工程を挟んでいた可能性が高いが、小工程を挟んで工人や工具がかわる様相は認められない。（第 10 図－12、第 13 図－12、写真図版８－２－12）

両資料とも、１次調整の省略、底部調整の採用などⅤ群埴輪（川西 1978）の特徴を有しているが、突帯の間隔は大きくばらつくことなく、水平で突出度が高いなどⅣ群埴輪の要素も併せ持つ。それゆえⅤ群埴輪出現期の資料として位置づけることが妥当であろう。（木村　理）

13 朝顔形埴輪　胴径（最大）：34.8 cm（復元）。器高：16.7 cm（残存）。厚さ：0.9～1.3 cm。色調：内・外・断面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径２mm 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整が施されている。突帯の高さは 0.7 cmでおおむね水平に巡らされている。その間隔は 10.2cm 程度を測る。（第９図－⑬、第 14 図－13、写真図版８－１－13）

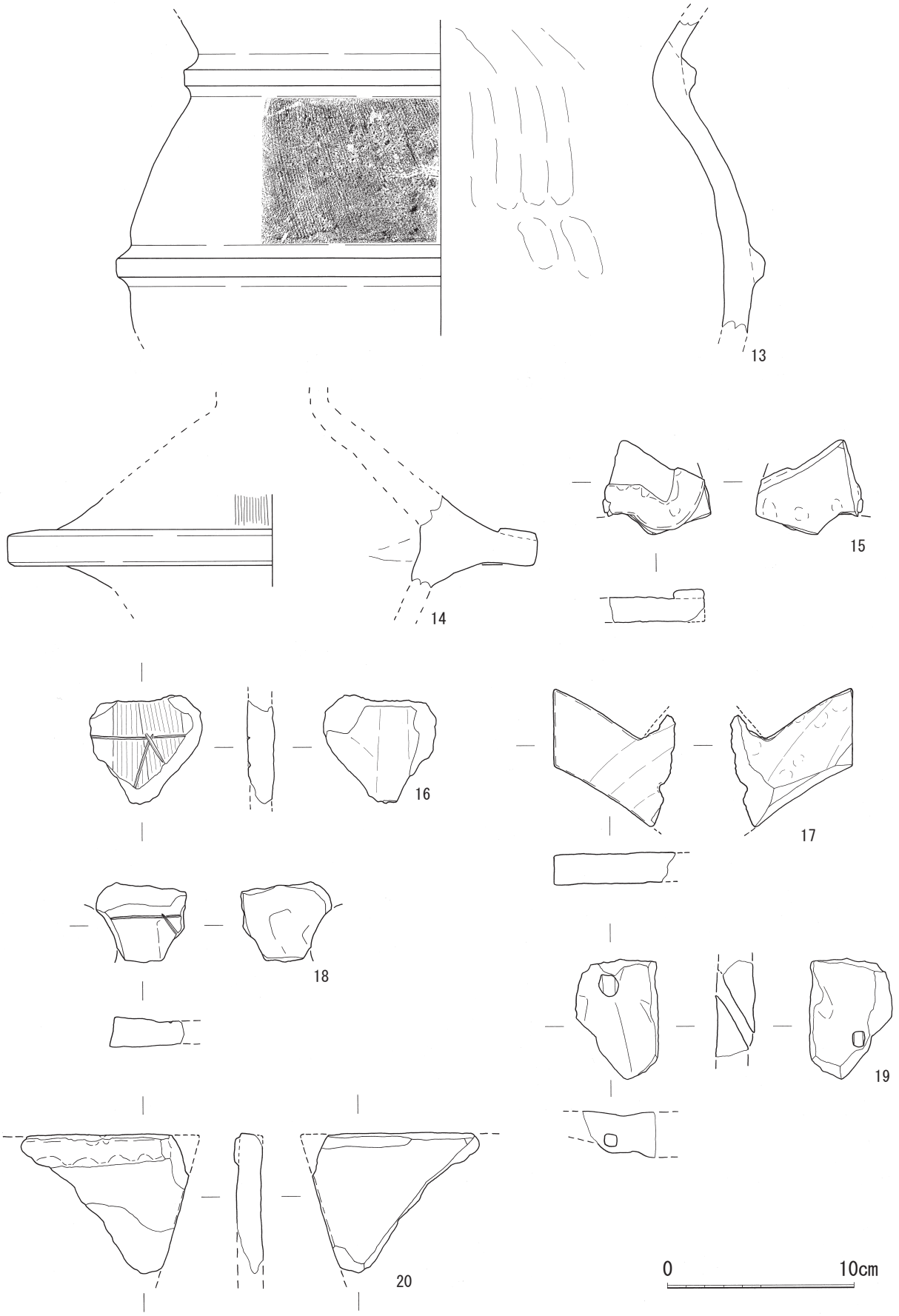
14 形象埴輪　最大径：28.4 cm（復元）。厚さ：1.8～4.8 cm。色調：内・外面は橙色（7.5YR 6/6）、断面は黄橙色（10YR 8/6）。胎土：粗。直径２mm 以下の砂粒を多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整を施しているが、磨滅のため不明瞭である。衣蓋形埴輪の蓋部もしくは人物形埴輪の裾部と思われ、その端部には粘土帯を貼り付けている。（第 14 図－14、写真図版９－１－14）

15 馬形埴輪　縦：5.0 cm（残存）。幅：5.8 cm（残存）。厚さ：1.3～1.7 cm。色調：表・裏面は橙色（5YR 7/6）、断面は黄灰色（2.5Y 4/1）。胎土：やや密。直径３mm 以下の石英・長石・雲母・赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。表面には粘土紐が貼り付けられ、裏面はユビオサエ痕とナデ調整が施されている。馬形埴輪の鏡板部と思われる。（第 11 図－15、写真図版９－１－15）

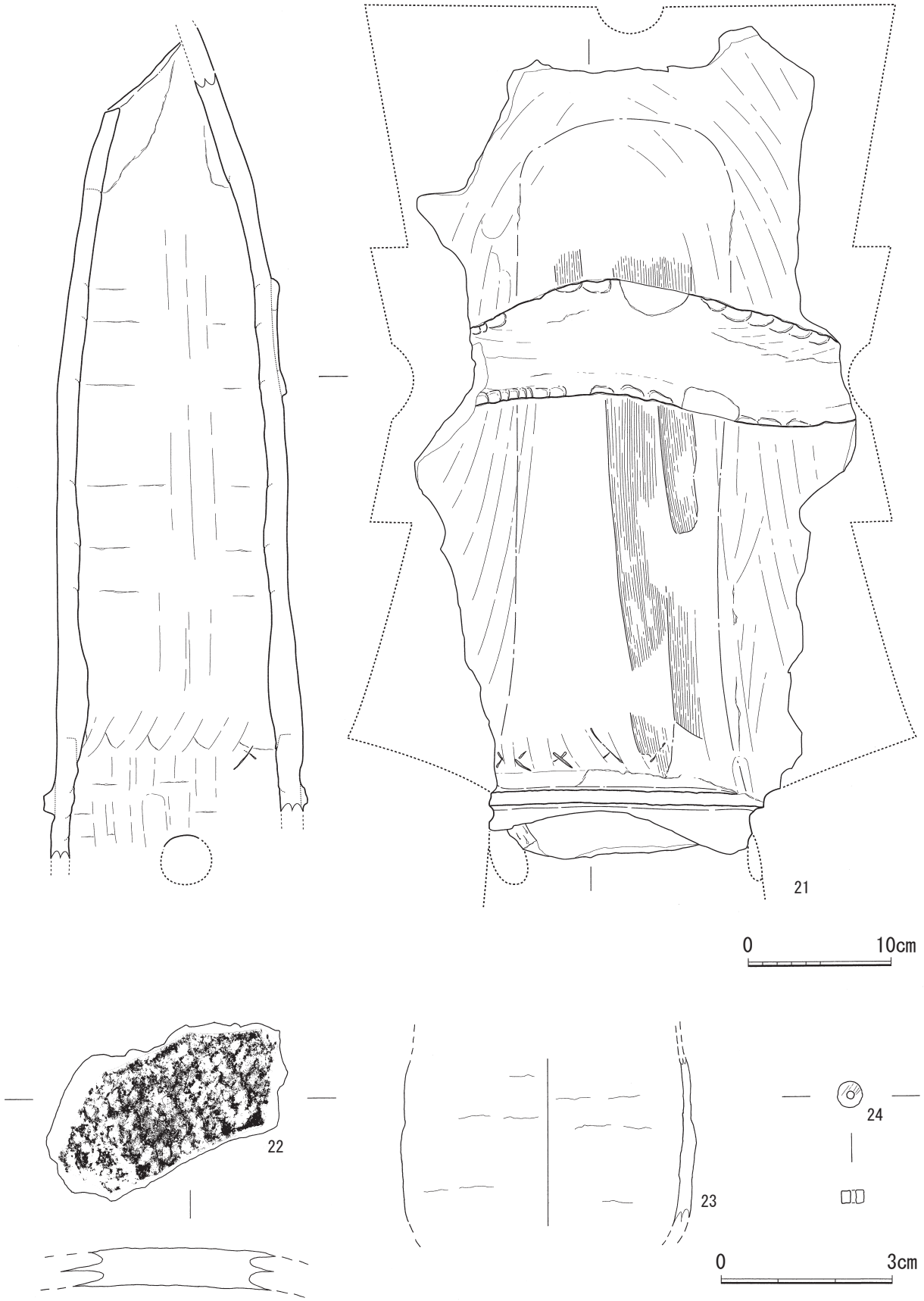
16 形象埴輪　縦：6.5 cm（残存）。幅：5.8 cm（残存）。厚さ：1.4 cm。色調：表・裏面は橙色（5YR 6/6）、断面は黄灰色（2.5Y 6/1）。胎土：やや粗。直径３mm 以下の石英・長石・雲母・赤色粒子を非常に多く含む。焼成：良好。残存度：小片。表面には線刻による模様が施され、裏面はナデ調整が施されている。石見型埴輪の形象部もしくは人物形埴輪の帯部と思われる。（第 11 図－16、写真図版９－１－16）

17 形象埴輪　縦：6.5 cm（残存）。幅：7.3 cm（残存）。厚さ：1.1 cm。色調：表・裏面はにぶい橙色（7.5YR 6/4）、断面は褐灰色（10YR 5/1）。胎土：やや密。直径２mm 以下の石英・長石・雲母・赤色粒子・黒色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。衣蓋形埴輪の蓋部の一部とも思われるが、表裏を明確に作り分けており、表面に丁寧なナデ調整を施す一方、裏面のナデ調整は粗く、ユビオサエ痕が明瞭に残っている。（第 11 図－17、写真図版９－１－17）

18 石見型埴輪　縦：4.9 cm（残存）。幅：4.3 cm（残存）。厚さ：1.6 cm。色調：表・裏面はにぶい橙色（5YR 7/4）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：やや密。直径２mm 以下の石英・長石・



第 14 図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（４）



第 15 図　出土遺物（ＯＧ2013－１）（５）

雲母・赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。表面には線刻による文様が施され、裏面はナデ調整が施されている。石見型埴輪の形象部片で、刳り込み部の破片とみられ、胎土から 20・21 とは別個体である。（第 12 図－18、写真図版９－１－18）

19 石見型埴輪　縦：6.4 ㎝（残存）。幅：4.5 ㎝（残存）。厚さ：2.0 ㎝。色調：表・裏面は橙色（5YR 6/6）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。胎土：やや粗。直径５㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒子を非常に多く含む。焼成：良好。残存度：小片。表面にはナデ調整が施されている。表裏を貫通する孔が１カ所開けられている。石見型埴輪の形象部片で、18 と同一個体の可能性がある。（第 12 図－19、写真図版９－１－19）

20 石見型埴輪　縦：7.5 ㎝（残存）。幅：8.9 ㎝（残存）。厚さ：1.3 ㎝。色調：表・裏面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面は黄灰色（2.5Y 6/1）。胎土：やや粗。直径３㎜以下の石英・長石・黒色粒子・赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。表面の上端部に粘土紐が貼り付けられている。裏面はナデ調整が施されている。石見型埴輪の形象部片で、21 と同一個体の可能性がある。（第 12 図－20、写真図版９－１－20）　（村上・實盛）

21 石見型埴輪　残高 57.8cm。厚さ 1.0～2.1cm。色調：外面は橙色（7.5YR6/6）、内面はにぶい橙色（7.5YR6/4）、断面は黄灰色（2.5Y5/1）。胎土：５㎜以下の砂粒を多く含む。焼成：良好。

石見型埴輪の形象部片で、基部は大部分が欠損する。形象部表面の中央に粘土を貼り付けて上下を二分割する特徴をもつ。残存する基部突帯下の両側面には円形透孔がある。石見型埴輪に特徴的な形象部の小穿孔はない。基部は、粘土紐積み上げで円筒を製作した後、倒立し、突帯を貼り付ける。突帯の貼り付け技法は不明であるが、断続ナデ技法は用いない。その後、基部上端の内外面に×印状の刻み目を横方向に連続して施し、形象部との接着を工夫する。形象下部を基部に接合した後、接合部を粗くナデ調整する。そのため、最終的な製品にも刻み目がナデ調整の合間に観察できる。以降、粘土紐を積み上げて円筒状に形象中心部を成形する。成形後ハケ調整し、両側面へ鰭状に粘土を貼り付け、丁寧にナデ調整を施す。側面は大部分が欠損するため不明確であるが、残存する下部は側面をヘラケズリ調整していることから、典型的な石見型埴輪の外形になるように、側面を切り取って整形したと考えられる。最後に形象部表面の中央に帯状の粘土を薄く貼り付け、その上下にそれより幅が狭くやや厚い粘土紐を貼り付ける。接合は端部側を連続的に指オサエし、粘土帯側はナデ調整する。類例には、奈良市率川古墳出土例（鐘方 2009）、長岡京市塚本古墳出土例（京都府立山城郷土資料館 2016）がある。（第 10 図－21、第 15 図－21、写真図版 10－１－21）

（村瀬　陸）

縄文土器

22 縄文土器片　縦：3.1 ㎝（残存）。幅：4.2 ㎝（残存）。厚さ：0.65 ㎝。色調：外面はにぶい赤褐色（5YR 5/4）、内面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）、断面は灰褐色（5YR 4/2）。胎土：粗。直径２㎜以下の石英・長石・角閃石を非常に多く含む。生駒西麓産の胎土か。焼成：やや不良。残存度：小片。外面には縄文、内面はナデ調整が施されている。縄文時代中期～後期のものと思われる。（第９図－㉒、第 15 図－22、写真図版９－２－22）

製塩土器

23 製塩土器　胴径（最大）：5.2 ㎝（復元）。器高：2.9 ㎝（残存）。厚さ：0.2 ㎝。色調：内・外面は橙色（7.5YR 6/6）、断面は灰白色（2.5Y 7/1）。胎土：緻密。直径１㎜以下の雲母・赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はナデ調整が施されている。（第 15 図－23、写真図版９－２－23）

石製品

24 滑石製臼玉　直径：0.4 ㎝。厚さ：0.2 ㎝。色調：灰色（7.5Y 4/1）。21 と共伴して出土した。（第 15 図－24、写真図版９－２－24）　（村上・實盛）

第４章　大上遺跡（ＯＧ2013－２）調査の成果

第１節　基本層序

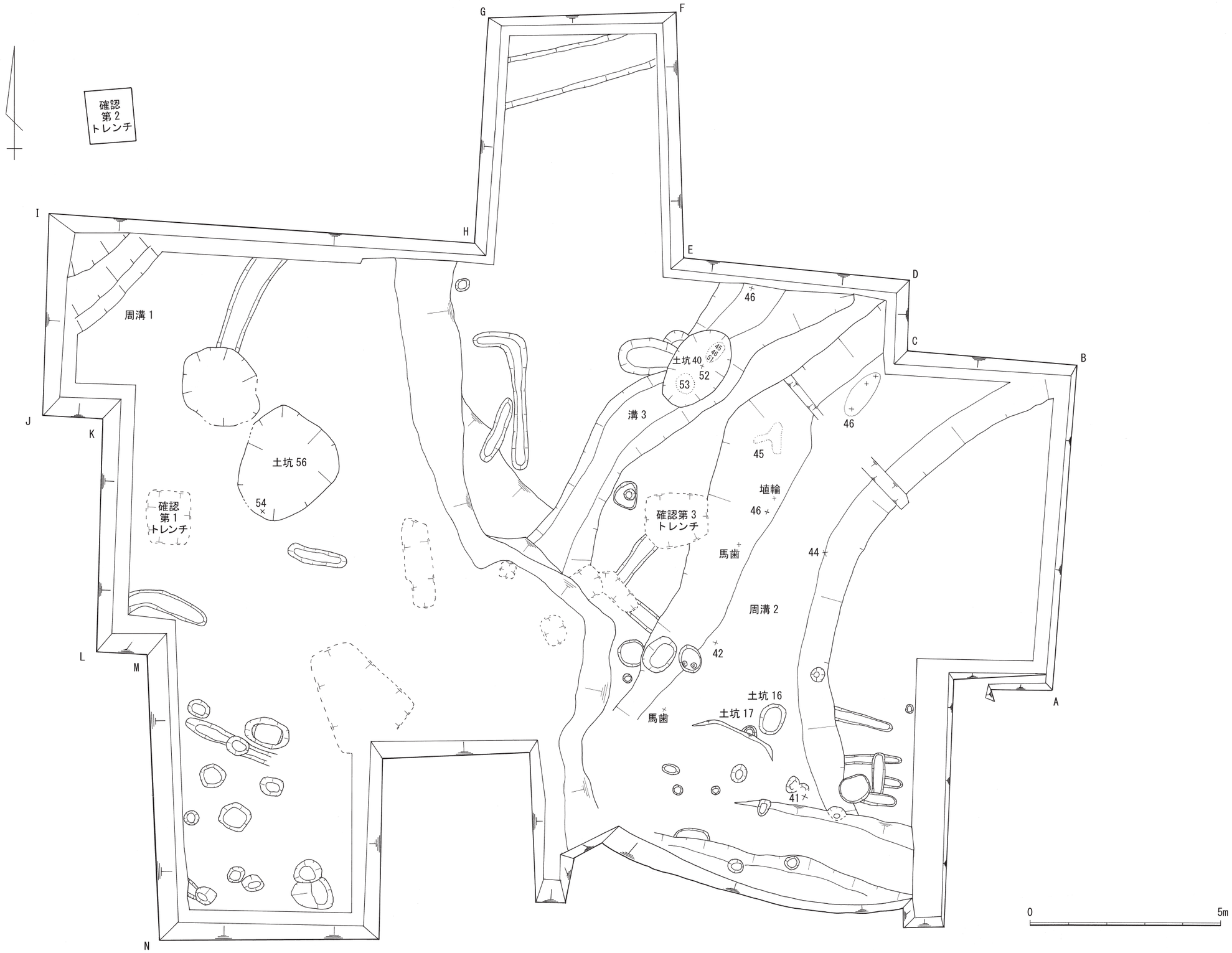
今回の発掘調査地区は、調査前には資材置き場であった。調査地区の東半と西半では造成前の水田が段状になっていたようで、その地形をある程度保っている状態であった。東半には 0.1mほど、西半には 0.3mほど盛土されており、その下層は約 0.2mの耕土と約 0.1mの床土が存在した。これらは資材置き場造成（平成年間）以前の水田に伴うものである。その下層は部分的に 0.1mほど中世包含層が堆積し、その下層は部分的に古墳時代の包含層が堆積していた。古墳時代包含層はほとんどの箇所で 0.1～0.3mほどであったが、ところによっては 0.5mほど堆積している箇所もあった。また一部の箇所では包含層自体の残存がなかった。その下層は明黄褐色で花崗岩粒を多く含むしまりが強い土層で、地山であり、その上面が古墳時代を中心とした遺構面であった。

以下、各土層の説明を述べる。

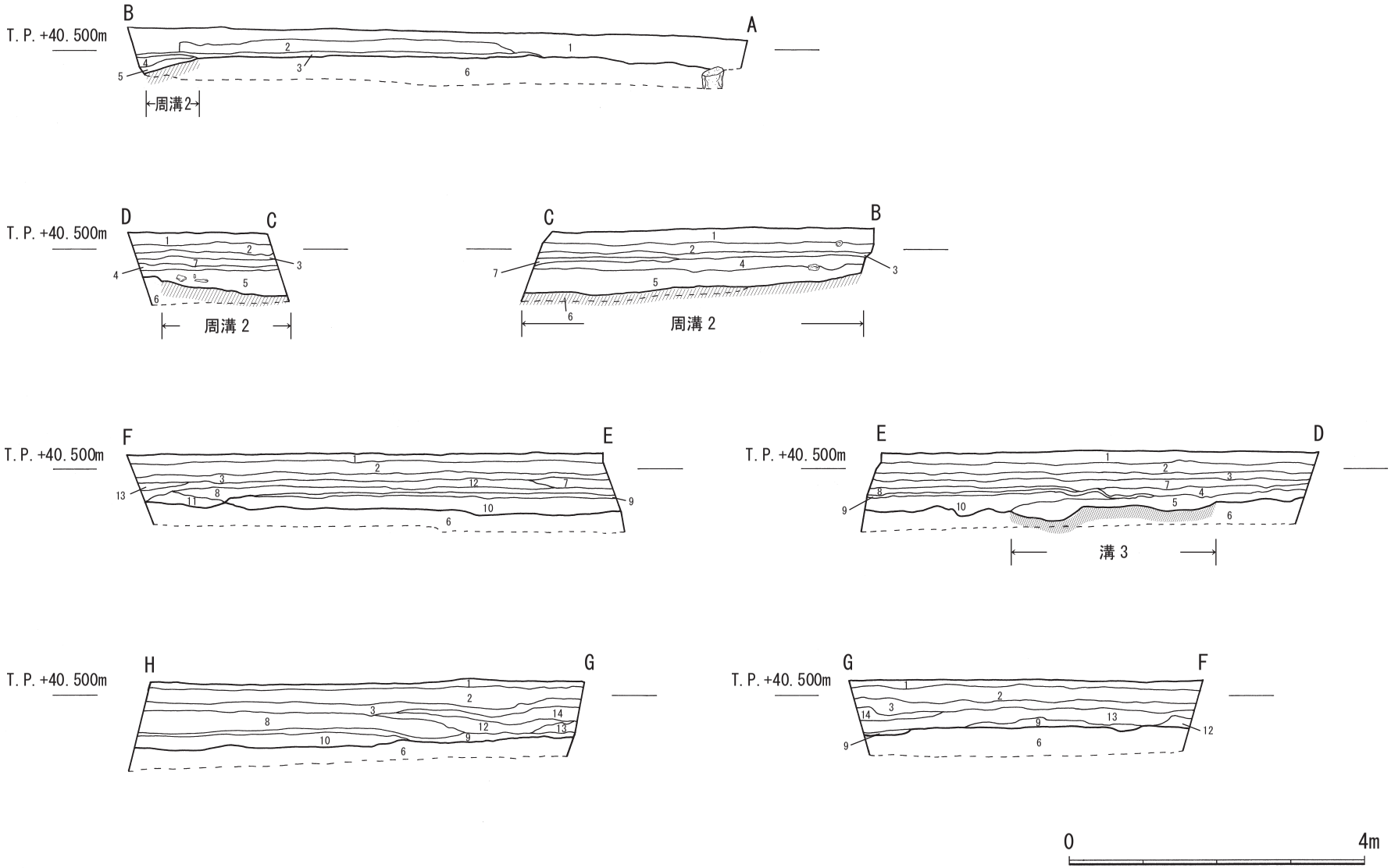
■調査地区断面（第 17・18 図）

1　盛土
2　耕土
3　床土
4　にぶい黄褐色砂質土　10YR 4/3　鉱物を多く含む
5　にぶい黄褐色砂質土　10YR 5/3
6　明黄褐色砂質土　10YR 6/6　花崗岩粒を多く含む　しまりが強い　地山
7　灰白色砂質土　10Y 7/2　還元により緑色に変色　中世包含層
8　明黄褐色砂質土　10YR 6/8　古墳時代包含層
9　明黄褐色砂質土　10YR 6/8　鉱物が少量混入　古墳時代包含層
10　にぶい黄色砂質土　2.5Y 6/3　砂粒・鉱物を多く含む　古墳時代後期包含層
11　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2
12　黄褐色砂質土　10YR 5/8　古墳時代包含層
13　にぶい黄褐色砂質土　10YR 5/4
14　にぶい黄橙色砂質土　10YR 7/4
15　黄灰色砂質土　2.5Y 5/1　耕作地段の堆積土
16　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2　耕作地段の堆積土
17　灰色砂質土　5Y 5/1　溝 58 埋土
18　明オリーブ灰色砂質土　5GY 7/1
19　黄灰色砂質土　2.5Y 4/1　周溝１埋土
20　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2　周溝１埋土
21　黄灰色砂質土　2.5Y 6/1　鉱物が多量に混入
22　浅黄色砂質土　2.5Y 7/4　砂粒を多く含む
23　灰黄褐色砂質土　10YR 5/2

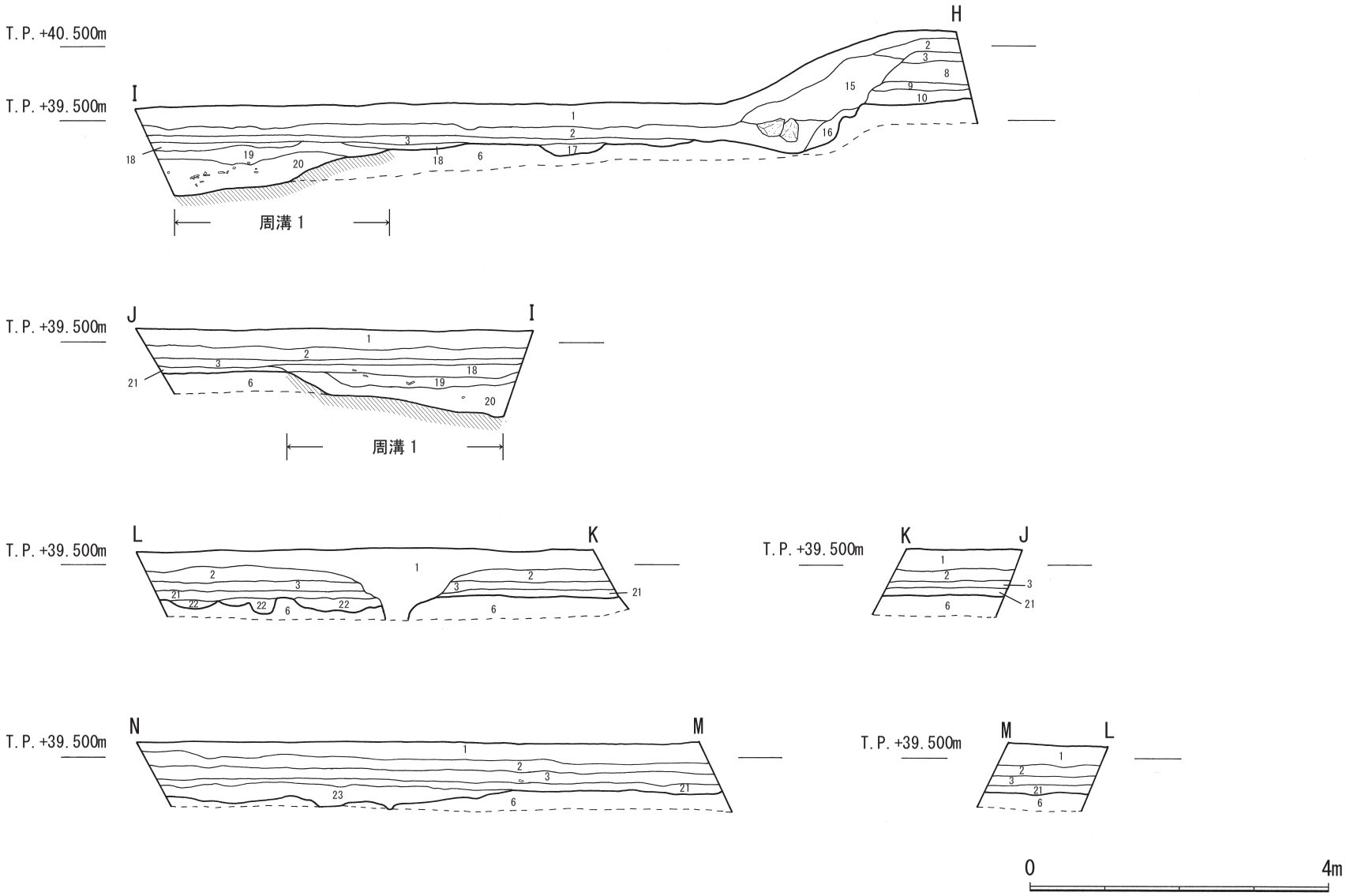
（實盛）



第16図　調査地区平面図（ＯＧ2013－２）



第17図　調査地区断面図（ＯＧ2013−２）（１）



第18図　調査地区断面図（ＯＧ2013-２）（２）

第２節　検出遺構

今回の調査では、旧水田の段を境に調査地区の西側を１地区、東側を２地区と便宜的に分けた。確認した遺構は、多くが古墳時代の遺構で、古墳の周溝２基、溝 16 基、土坑 40 基の合計 13 基の遺構があった（第 16 図）。遺構面の標高は１地区北端で T.P.＋39.165m、南端で T.P.＋38.978m、２地区北端で T.P.＋40.025m、南端で T.P.＋39.884mであった。以下、遺物を掲載した主な遺構について遺構の種類ごとに詳述する。なお遺構の番号は、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。

周溝１　１地区の北西端で検出した。北西－南東方向の溝で、出土遺物の大半が埴輪であり、古墳の周溝の可能性が高い。近接する確認調査第２トレンチで古墳周溝とみられる土層を検出しており、この遺構の中心部分とみられる。このトレンチとの位置関係から、この古墳は円墳である可能性が高いが、墳丘部分を検出しておらず、規模等は不明である。『四條畷市史』第五巻で、この古墳を「大上７号墳」と名付けている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。周溝１の検出できた規模は長さ 3.1m、幅 2.0m以上で、深さは約 0.7mである。標高は上端が T.P.＋39.129m、検出できた最深部は T.P.＋38.470mであった。確認調査の結果でも最深部の標高はほぼ同一であった（第 16・19 図・写真図版４－２）。遺物は、須恵器台付壺（第 21 図－33）、円筒埴輪（第 21 図－34～37）、形象埴輪（第 22 図－38～40）を図化した。また、確認調査第２トレンチで出土し、この遺構に属するとみられる遺物として、形象埴輪２点を図化した（第 20 図－31・32）。これらの出土遺物から、周溝１により構成される大上７号墳は、古墳時代後期前半の古墳とみられる。

周溝２　２地区の東側で検出した。北東から南へと弧を描く形をした溝で、その形状から古墳の円丘部の周溝の可能性が高い。円丘部の規模は直径 16.4mに復元できる。後述する溝３が二重目の周溝の可能性があり、前方後円墳の可能性も考えられるが、現状では墳形は不明である。『四條畷市史』第五巻で、この古墳を「大上８号墳」と名付けている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。周溝２の検出できた規模は長さ 13.5m、幅は北端で 4.3m、南端で 5.0m、深さは北端で約 0.4m、南端で約 0.3mである。標高は北端部分の東（墳丘）側上端が T.P.＋40.198m、西側上端が T.P.＋39.978m、底部が T.P.＋39.799mで、南側部分の東（墳丘）側上端が T.P.＋39.877m、西側上端は T.P.＋39.709m、底部は T.P.＋39.607mであった（第 16 図・写真図版５－１～７－１）。遺物は、土師器高坏（第 23 図－41）、碗（第 23 図－42）、須恵器壺（第 23 図－43～45）、甕（第 23 図－46）、韓式系土器（第 23 図－47）、高坏状土製品（第 23 図－48）を図化した。埴輪は図示できていないが、ごく少量のみ出土している（第 16 図・写真図版７－１）。出土埴輪のタガは周溝１出土のものよりさらに低くつぶれた形状のものである。また馬歯の出土もあった（写真図版６－２）。これらの出土遺物から、周溝２により構成される大上８号墳は、大上７号墳より後出する古墳時代後期中頃～後半の古墳とみられる。

溝３　２地区中央付近で検出した。北西から南東へと向いた溝で、北端は調査地区外に延び、南端は水田造成の際に破壊されている。検出できた規模は長さ 10.4m、幅 1.7m、深さは約 0.2mである。標高は北端部分の東側上端が T.P.＋39.964m、西側上端が T.P.＋39.908m、底部が T.P.＋39.791mで、南端部分の東側上端は T.P.＋39.742m、西側上端は T.P.＋39.689m、底部は T.P.＋39.540mであった（第 16 図・写真図版５）。遺物は、いずれも周溝２・土坑 40 出土遺物と接合したもので、須恵器壺（第 23 図－45）・甕（第 23 図－46）・坏蓋（第 24 図－51）を図化した。溝３は、周溝２と同一方向に平行するようにやや弧を描いて掘削されていること、出土遺物が接合することから、周溝２と同時に目的を持って掘削された可能性が高い。周溝２の外側の、大上８号墳の二重目の周溝の可能性がある。

土坑 16　２地区の南半で、周溝２の底部において検出した（第 16 図・写真図版６－１）。後述する土坑 17 とともに周溝２機能時に掘削されたとみられるが、性格は不明である。東西 0.62m、南北 0.84mの楕円形を呈する。深さは約 0.24mである。上端の標高は T.P.＋39.639m、下端は T.P.＋39.397mであった。韓式系土器片（第 24 図－49）などが出土した。

土坑 17　２地区の南半で、周溝２の底部において検出した（第 16 図）。先述の土坑 16 と同様に周

第19図　周溝１遺物出土状況図（ＯＧ2013－２）

溝２機能時に掘削されたとみられるが、性格は不明である。直径0.4mの円形を呈すると思われるが、南半を後世に攪乱されている。深さは約0.1mであり、二段に落ち込んでいる。上端の標高はT.P.＋39.612m、下端はT.P.＋39.521mであった。須恵器坏身（第24図－50）などが出土した。

土坑40　２地区の北半で、溝３の底部において検出した（第16図・写真図版５・７－２）。東西1.43m、南北2.27mの楕円形を呈する。溝３機能時の掘削とみられ、遺物の出土も豊富であり、完形に近い遺物が出土していることから、溝３が大上８号墳の二重目の周溝であるなら、周溝内埋葬の可能性や、周溝内祭祀に伴う土器埋納遺構の可能性がある。深さは約 0.3mである。上端の標高は T.P.＋39.733m、下端はT.P.＋39.469mであった。須恵器坏蓋（第24図－51）、瑕（第24図－52）、土師器長胴甕（第24図－53）などが出土した。また、この遺構から出土した土器片が、周溝２および溝３出土の土器と接合したものがあった（第23図－45・46）。

土坑56　１地区の北半において検出した（第16図・写真図版４－１）。東西2.6m、南北3.0mのいびつな円形を呈する。深さは0.14mである。上端の標高はT.P.＋39.135m、下端はT.P.＋38.995mであった。須恵器坏蓋（第24図－54）などが出土した。（實盛）

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

土師器

25 皿　口径：10.4 ㎝（復元）。器高：1.9 ㎝（残存）。厚さ：0.4 ㎝。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）、外面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）、断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径１㎜以下の赤色粒子・雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部は「て」字状を呈する。11 世紀末のＢｃタイプのものと思われる。遺構面の検出精査時に出土していることから、この時期に古墳が削平されたものと考える。（第 20 図－25、写真図版 11－１－25）

須恵器

26 坏身　口径：13.2 ㎝（復元）。器高：3.5 ㎝（残存）。厚さ：0.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：やや密。直径２㎜以下の石英・長石・赤色粒子・黒色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。６世紀後半のＴＫ43 型式（Ⅱ型式第４段階）のものと思われる。（第 20 図－26、写真図版 11－１－26）

27 樽形瓹もしくは碗　厚さ：0.5～1.0 ㎝。色調：内・外面は赤灰色（10R 5/1）、断面は灰赤色（10R 5/2）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。５世紀中頃のＴＫ216 型式（Ⅰ型式２段階）ものと思われる。（第 20 図－27、写真図版 11－１－27）

韓式系土器

28 壺・甕　長さ：5.2 ㎝（残存）。幅：2.4 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 6/）。断面は灰赤色（2.5YR 6/2）。胎土：緻密。焼成：良好、須恵質。残存度：小片。外面には格子目叩きが施されている。壺もしくは甕の破片と思われる。（第 20 図－28、写真図版 11－１－28）

29 壺・甕　長さ：4.9 ㎝（残存）。幅：2.8 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.8 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（7.5Y 6/1）。胎土：密。直径１㎜以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好、須恵質。残存度：小片。外面には縄蓆文と格子目の二種類の叩きが施されている。壺もしくは甕の破片と思われる。（第 20 図－29、写真図版 11－１－29）

土製品

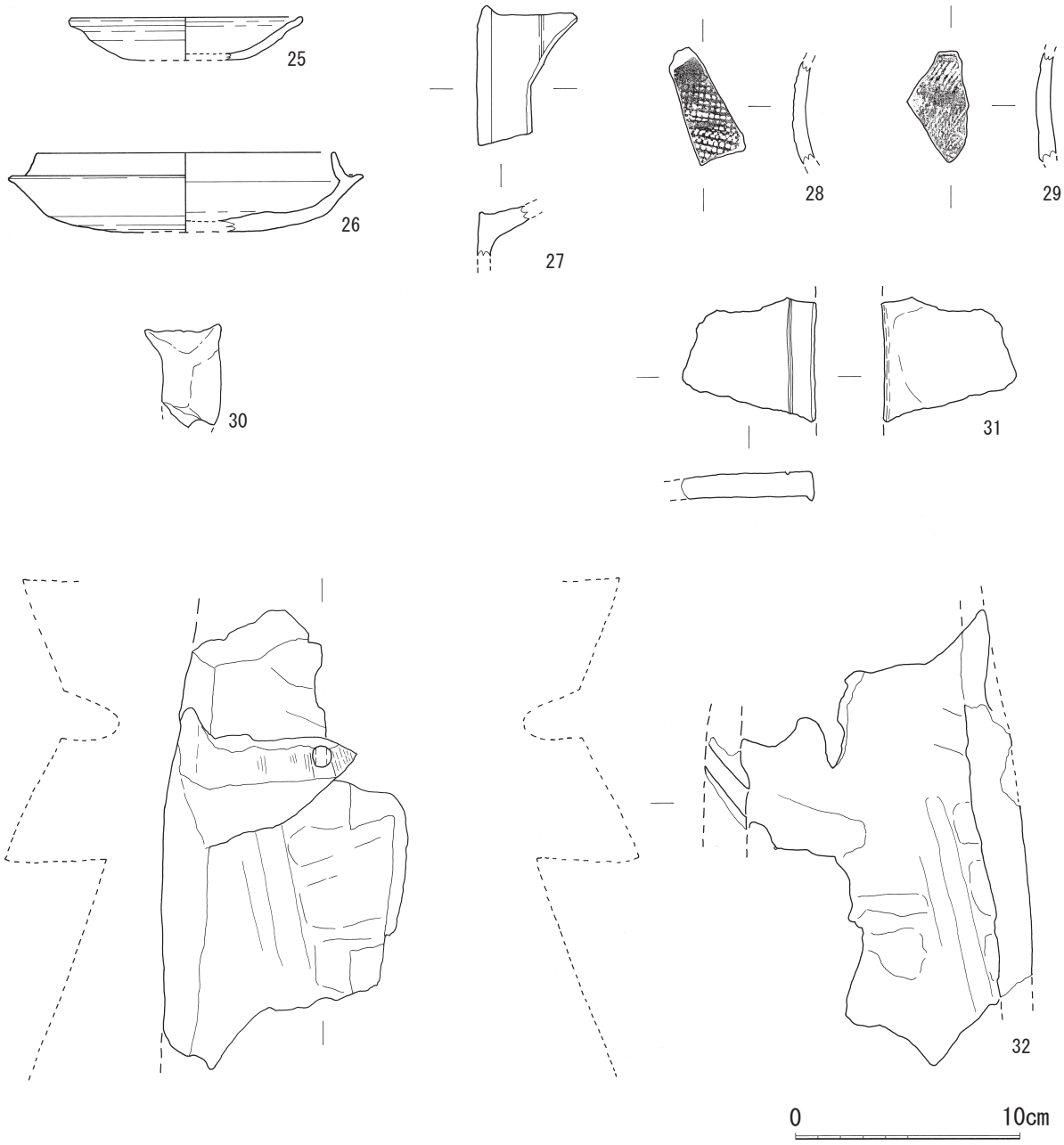
30 不明土製品　長さ：4.5 ㎝（残存）。厚さ：2.4～3.4 ㎝。色調：外面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。直径３㎜の棒に粘土を巻きつけて作製している。（第 20 図－30、写真図版 11－１－30）

２．確認調査第２トレンチ出土遺物

埴輪

31 形象埴輪　長さ：5.5 ㎝（残存）。幅：6.0 ㎝（残存）。厚さ：1.0～1.3 ㎝。色調：表・裏面は淡橙色（5YR 8/4）、断面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：やや粗。直径２㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子を非常に多く含む。焼成：良好。残存度：小片。石見型埴輪もしくは盾形埴輪の破片と思われる。周溝１内の遺物である。（第 20 図－31、写真図版 11－２－31）

32 石見型埴輪　高さ：20.7 ㎝（残存）。幅：10.8 ㎝（残存）。厚さ：2.0 ㎝。色調：内・外面は橙色（5YR 6/6）、断面は黄灰色（2.5Y 5/1）。胎土：やや粗。直径３㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒子・黒色粒子を非常に多く含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はほとんど欠損しているが、タテハケ調整、内面はヘラナデ・ナデ調整が施されている。側面に板状部の貼付痕がみられる。文様は確認できないが、無文か分割線刻のみのものと思われる。６世紀代のものと思われる。周溝１内の遺物である。（第 20 図－32、写真図版 11－２－32）



第20図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（１）

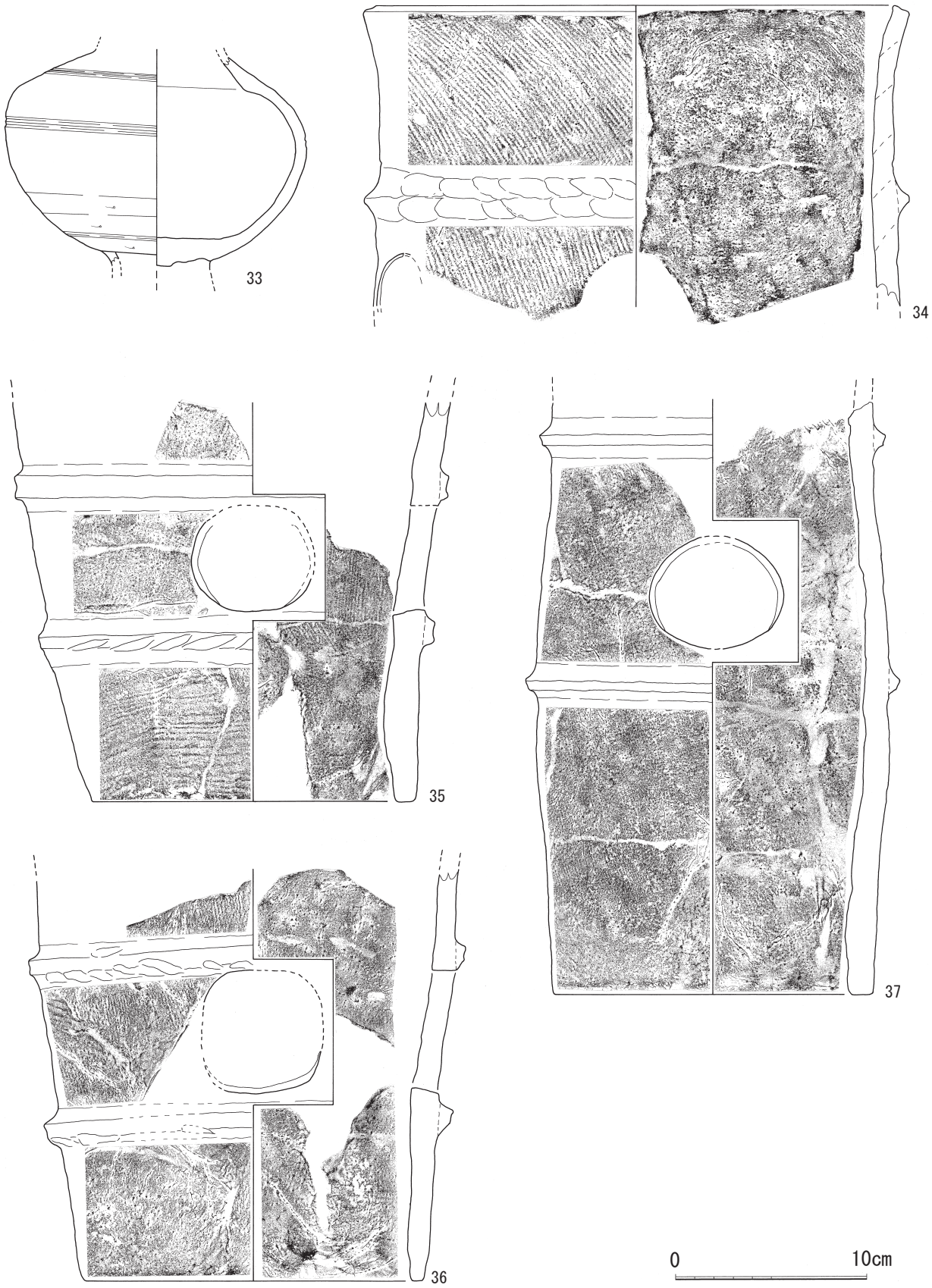
３．周溝１出土遺物

須恵器

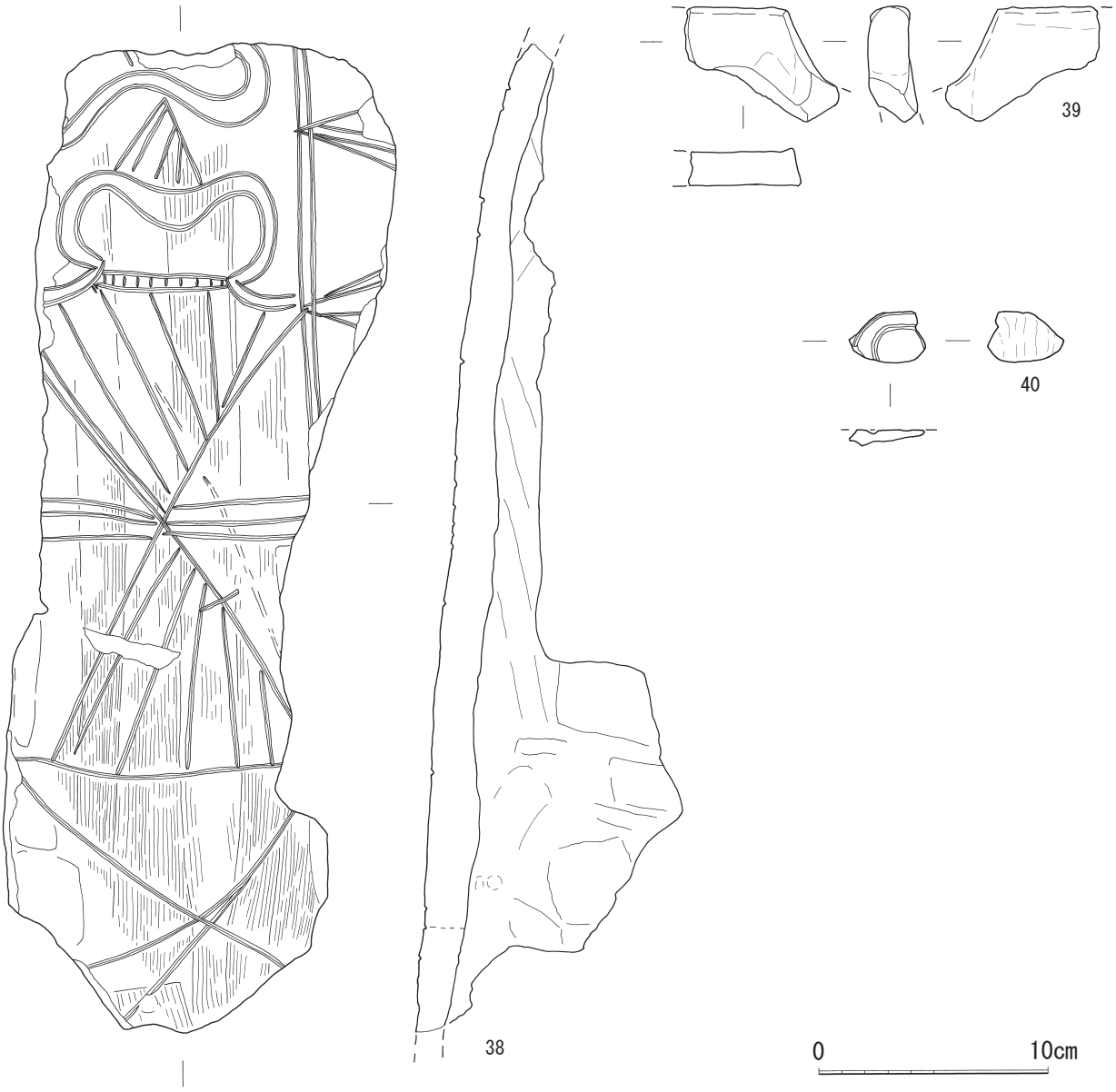
33 台付壺　胴径：15.7 ㎝。器高：11.2 ㎝（残存）。厚さ：0.4 ～1.4 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）、外面下半部は灰色（N 6/）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒・黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：胴部のみ。頸部付近と胴部中央にそれぞれ２条の沈線を巡らせる。おそらく台部の３カ所に台形のスカシが開けられている。（第 19 図－33、第 21 図－33、写真図版 12－１－33）

埴輪

34 普通円筒埴輪　口径：27.2 ㎝（復元）。器高：15.7 ㎝（残存）。厚さ：0.9～1.1 ㎝。色調：内・外面は橙色（7.5YR 6/6）、断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや粗。直径２㎜以下の白色



第21図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（２）



第 22 図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（３）

砂粒をやや多く含む。焼成：良好。外面は幅 2.5 ㎝のタテハケ調整、内面はユビナデ調整が施されている。突帯の高さは 0.6 ㎝で断続ナデ技法Ｂにより成形している。口縁端部は内面側をつまみ上げるようにして整形している。（第 21 図－34、写真図版 12－１－34）

35 円筒埴輪　底径：17.0 ㎝。器高：20.8 ㎝（残存）。厚さ：1.7 ㎝。色調：内・外面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面は灰白色（2.5Y 7/1）。胎土：やや粗。直径３㎜以下の石英・長石・赤色粒子・黒色粒子を多く含む。焼成：やや不良。外面はタテハケ調整、内面はタテハケ調整後ユビナデ調整が施されている。突帯の高さは 0.5 ㎝で最下段の突帯には断続的なナデ調整が施されている。川西編年Ｖ期のものと思われる。（第 19 図－35、第 21 図－35、写真図版 12－１－35）

36 円筒埴輪　底径：17.8 ㎝。器高：21.5 ㎝（残存）。厚さ：1.2 ㎝。色調：内・外面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）、断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：やや粗。直径３㎜以下の石英・長石・赤色粒子・黒色粒子を多く含む。焼成：やや不良。外面はタテハケ調整、内面はユビナデ調整が施されている。突帯の高さは 0.6～0.8 ㎝で最下段及び下から２段目の突帯には断続的なナデ調整が施されている。川西編年Ｖ期のものと思われる。（第 19 図－36、第 21 図－36、写真図版 12－１－36）

37 円筒埴輪　底径：16.8（復元）㎝。器高：30.8 ㎝（残存）。厚さ：1.4 ㎝。色調：内・外面は

橙色（5YR 6/8)、断面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：粗。直径３㎜以下の石英・長石・赤色粒子・黒色粒子を非常に多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はユビナデ調整が施されている。突帯の高さは0.6㎝。突帯と外面調整から川西編年Ｖ期のものと思われる。底部調整を欠く点と上部がすぼまる点からは、形象埴輪の基部の可能性も考えられる。（第19図－37、第21図－37、写真図版12－１－37）

38 盾形埴輪　高さ：43.0㎝（残存）。幅：17.2㎝（残存)。厚さ：2.0㎝。色調：内・外面は橙色（5YR 6/6)、断面は褐灰色（5YR 5/1）。胎土：やや粗。直径３㎜以下の石英・長石・黒色粒子・赤色粒子を非常に多く含む。焼成：良好。残存度：1/5程度。表面にはタテハケ調整後に線刻により文様を施している。中央区画の線刻が修正されており、その際にナデによりハケメが消されている。板状部はナデ調整が施され、一部に板状部のはがれた痕跡がみられる。（第19図－38、第22図－38、写真図版12－２－38）

39 形象埴輪　長さ：5.0㎝（残存）。幅：6.7㎝（残存)。厚さ：1.5㎝。色調：表・裏面は橙色（7.5YR 7/6)、断面は黄灰色（2.5Y 6/1）。胎土：やや粗。直径２㎜以下の長石・石英・赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。表裏面ともにナデ調整が施されているが、裏面の調整が粗いことから表裏面が意識されていると思われる。衣蓋形埴輪もしくは石見型埴輪の破片と思われる。（第22図－39、写真図版12－２－39）

40 形象埴輪　長さ：2.2㎝（残存）。幅：3.3㎝（残存)。厚さ：0.7㎝。色調：橙色（5YR 6/6）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の長石・石英・赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。表面に円形の線刻が２条施されている。盾形埴輪、石見型埴輪、靫形埴輪などの破片と考えられる。（第22図－40、写真図版12－２－40）

４．周溝２出土遺物

土師器

41 ミニチュア高坏　口径：7.8㎝。器高：7.4㎝（残存）。厚さ：0.6㎝。色調：内・・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 6/3）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：3/5。体部外面はナデ・ユビオサエ調整が施されている。６世紀代のものと思われる。（第16図－41、第23図－41、写真図版13－１－41）

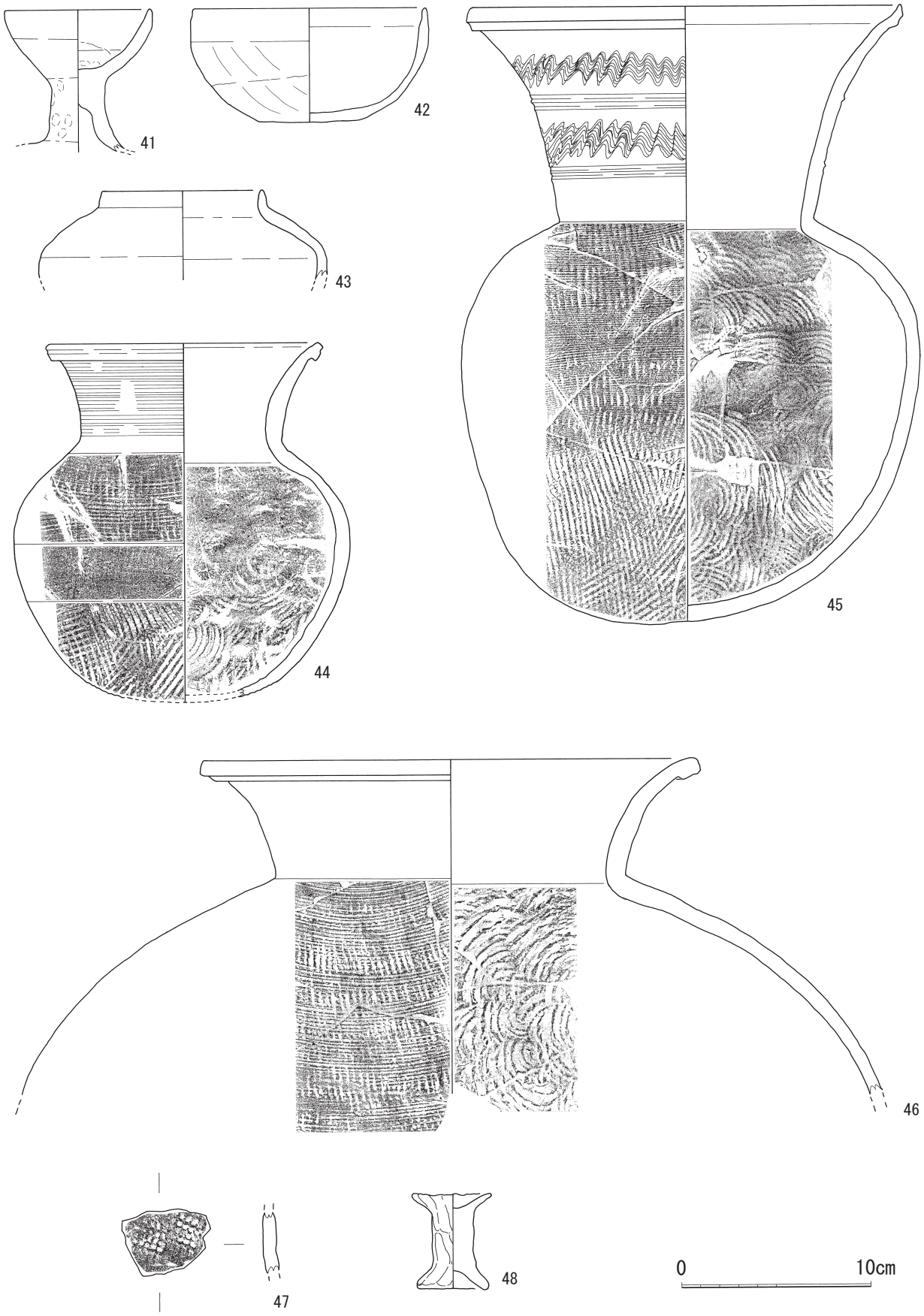
42 碗　口径：12.0㎝（復元）。器高：6.0㎝。厚さ：0.3～0.7㎝。色調：内・・外・断面は橙色（7.5YR 6/6）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。体部外面はケズリ後粗いナデ調整、内面はナデ調整が施されている。６世紀代のものと思われる。（第16図－42、第23図－42、写真図版13－１－42）

須恵器

43 短頸壷　口径：8.4㎝（復元）。器高：4.7㎝（残存）。厚さ：0.5㎝。色調：内・断面は灰白色（N 7/)、外面は灰色（N 5/）。胎土：やや密。直径２㎜以下の長石・石英をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。６世紀後半のＴＫ10型式新段階（Ⅱ型式３段階）のものと思われる。（第23図－43、写真図版13－１－43）

44 広口壷　口径：14.2㎝。器高：18.6㎝（残存）。胴径：17.7㎝。厚さ：0.6～1.0㎝。色調：内・外面は灰色（N 5/)、断面は灰赤色（2.5YR 6/2）。胎土：やや密。直径３㎜以下の長石・石英・赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：3/5。頸部外面はカキメ調整、肩部外面は平行タタキ調整後カキメ調整、胴部中央は平行タタキ調整後カキメ調整を施し一部ナデ消している。胴部下半は平行タタキ調整を施している。内面には同心円文の当具痕が見られる。６世紀中頃のＴＫ10型式古段階（Ⅱ型式２段階）のものと思われる。（第16図－44、第23図－44、写真図版13－１－44）

45 長頸壷　口径：23.0㎝。器高：32.3㎝。胴径：24.1㎝。厚さ：0.5～0.8㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。頸部外面は２条１単位の沈線を２単位巡らせて区画し、その間に波状紋を巡らせている。肩部外面は格子目タタキ調整後カキメ調整、胴部下半は格子目タタキ調整を施している。内面には同



第 23 図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（４）

心円文の当具痕が見られる。６世紀中頃のＴＫ10 型式古段階（Ⅱ型式２段階）ものと思われる。（第 16 図－45、第 23 図－45、写真図版 13－１－45）

46 大甕　口径：26.0 ㎝（復元）。器高：17.5 ㎝。厚さ：0.6～1.1 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 6/）、断面は灰赤色（2.5YR 6/2）。胎土：密。直径３㎜以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/5。肩部外面は格子目タタキ調整後カキメ調整を施している。内面には同心円文の当具痕が見られる。（第 16 図－46、第 23 図－46、写真図版 13－１－46）

韓式系土器

47 甕　長さ：3.5 ㎝（残存）。幅：4.8 ㎝（残存）。厚さ：　0.7 ㎝。色調：内・断面は灰白色（10YR 8/2）。外面は橙色（2.5YR 6/6）。胎土：やや密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好、土師質。残存度：小片。外面には格子目叩きが施されている。甕の破片と思われる。（第 23 図－47、写真図版 13－１－47）

土製品

48 高坏状土製品　口径：4.1 ㎝。底径：3.5 ㎝。器高：5.0 ㎝。厚さ：0.3～1.1 ㎝。色調：内・外面は橙色（7.5YR 6/6）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。手づくねにより成形している。城遺跡の 2003 年度第１次調査において古墳時代後期の旧河川のコーナーから類似品が 14 点出土している。（第 23 図－48、写真図版 13－１－48）

５．土坑 16 出土遺物

韓式系土器

49 甕　長さ：5.3 ㎝（残存）。幅：3.8 ㎝（残存）。厚さ：0.8 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（7.5Y 6/1）。胎土：やや密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好、須恵質。残存度：小片。外面には格子目叩きが施されている。甕の破片と思われる。（第 24 図－49、写真図版 13－２－49）

６．土坑 17 出土遺物

須恵器

50 杯身　口径：9.8 ㎝（復元）。器高：4.4 ㎝（残存）。厚さ：0.8 ㎝。色調：内・外・断面は青灰色（5B 6/1）。胎土：やや密。直径２㎜以下の長石・石英をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/5。５世紀後半のＴＫ47 型式（Ⅰ型式５段階）のものと思われる。（第 24 図－50、写真図版 13－２－50）

７．土坑 40 出土遺物

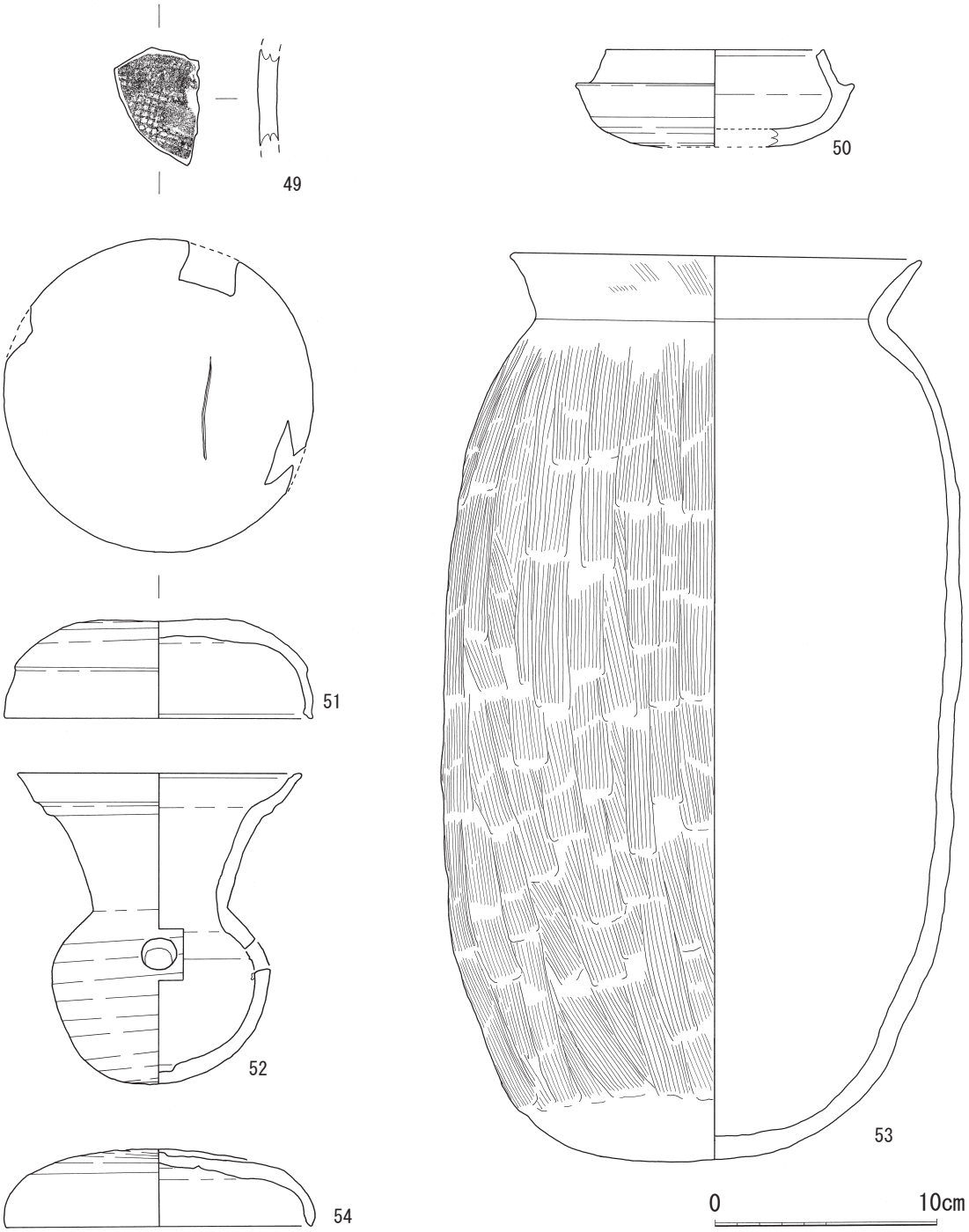
須恵器

51 杯蓋　口径：13.9 ㎝。器高：4.5 ㎝。厚さ：0.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜以下の長石・赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：9/10。天井部外面にヘラ記号が見られる。６世紀中頃のＴＫ10 型式古段階（Ⅱ型式２段階）のものと思われる。（第 16 図－51、第 24 図－51、写真図版 13－２－51）

52瓶　口径：12.8 ㎝。器高：14.0 ㎝。厚さ：0.7 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（5Y 6/1）。胎土：やや密。直径２㎜以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。５世紀後半のＴＫ47 型式（Ⅰ型式５段階）のものと思われる。（第 16 図－52、第 24 図－52、写真図版 13－２－52）

土師器

53 長胴甕　口径：18.4 ㎝。器高：40.8 ㎝。厚さ：0.4～1.0 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：密。直径１㎜以下の白色粒子・雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：4/5。外面は幅 1.5～２㎝のタテハケ調整、内面はナデ調整を施している。胴部の粘土帯は幅 2.5 ㎝程度である。６世紀前半頃と思われる。（第 16 図－53、第 24 図－53、写真図版 13－２－53）



第 24 図　出土遺物（ＯＧ2013－２）（５）

７．土坑 56 出土遺物

須恵器

54 杯蓋　口径：14.0 ㎝。器高：3.5 ㎝。厚さ：0.7 ㎝。色調：内・断面は明青灰色（5B 7/1）、外面は青灰色（5B 5/1）。胎土：やや密。直径２㎜ 以下の石英・長石をやや多く含む。焼成：良好、一部に歪みが見られる。残存度：9/10。６世紀後半のＴＫ43 型式（Ⅱ型式第４段階）のものと思われる。（第 16 図－54、第 24 図－54、写真図版 13－２－54）

（村上・實盛）

第５章　大上遺跡（大上古墳群）調査のまとめ

第１節　調査のまとめ

１．はじめに

大上遺跡の今回の２次にわたる調査では、合計３基のこれまで未発見であった古墳を検出し、周溝内から埴輪をはじめとした豊富な出土遺物があった。以下、まとめを行なっていきたい。

２．2013-1 次調査・大上６号墳

2013-1 次調査では、非常に狭い範囲ではあったが古墳周溝を検出した。周溝からは埴輪が多く出土し、葺石が転落したとみられる拳大～人頭大の花崗岩もいくつか検出した。出土遺物から、古墳時代後期前半の古墳とみられる。しかし検出規模が狭く古墳の墳形は不明であり、今後の調査で規模が明らかにできることを期待したい。

大上６号墳で特筆すべきは、検出規模が狭いにもかかわらず豊富に出土した埴輪であろう。形象埴輪の器種が多くあり、石見型埴輪、馬形埴輪のほか、人物埴輪や蓋形埴輪の可能性がある破片も出土している。また、円筒埴輪の出土も多く、完形に復元できた個体も存在した。この古墳は埴輪を豊富に使用し、葺石も施す古墳であったとみられる。

出土埴輪のうち石見型埴輪は、少なくとも２個体が存在したとみられ、うち１点は形象部の大半が残る状態で出土した。これまでにも四條畷市内では、大上古墳群内を通る旧河川などで出土したことがあるが（村上 2006)、埴輪の全容がこれほどわかる形で出土したのは初めてであった。しかも、出土資料は石見型埴輪に通有の形象部小穿孔を欠き、形象部は無文で粘土帯を張り付けたのみという、類例の少ないものであった。

石見型埴輪は、朝鮮半島との交渉に深いかかわりをもった地域の古墳に樹立されていることが指摘されている（和田 2006)。大上古墳群は、朝鮮半島から導入され交渉を保ちながら行なわれた馬匹生産にこの地域で携わっていた人々の古墳であったと考えられている（野島 2008・2009)。今回の調査でも周溝から馬歯や製塩土器が出土しており、馬飼いとの深いかかわりが想定できる。石見型埴輪の出土により、大上古墳群がそういった馬飼い集団の墓域とみられることがさらに補強できたと言えるだろう。

３．2013-2 次調査・大上７・８号墳

2013-2 次調査では、２基の古墳を検出した。このうち大上７号墳は、周溝の一部を検出したのみで墳形・規模等は不明であったが、一定量の埴輪等の出土遺物があった。出土埴輪から大上６号墳とほぼ同時期の古墳時代後期前半の古墳とみられ、葺石を伴ったかどうかは不明であった。出土埴輪のなかでも盾形埴輪は特異な文様が特徴である。寡聞にして類例が管見に及ばないが、類例の蓄積を期待したい。

大上８号墳は、延長 13.5mにわたって周溝の一部を確認し、直径 16.4mの円丘部をもつ古墳であることがわかった。同時に検出した溝３は、この古墳の周溝である周溝２出土遺物と出土した土器が接合し、方向も周溝２と同様に弧を描き平行する。この古墳の二重目の周溝である可能性があり、そうであれば前方後円墳の可能性も考慮されるが、全体を検出できたわけではないため、現時点では不明である。出土遺物はほとんどが土器で、埴輪はごく少量であり、大上７号墳より後出する特徴をもっていた。葺石はないものとみられる。これらの出土遺物からみて、大上８号墳は大上７号墳に後出する古墳時代後期中頃～後半に築造された古墳とみられる。

大上８号墳ではいくつか馬歯が出土しており、大上古墳群の他の古墳と同様の状況であった。近接する大上７号墳も含め、この調査で検出した２基の古墳も、大上古墳群の他の古墳と同様に馬飼い集団にかかわる古墳とみてよいであろう。

（實盛）

第２節　大上古墳群の全容

１．はじめに

大上遺跡の調査では、大上古墳群に属する古墳３基を部分的にではあるが調査し、古墳群の様相の一端を知ることができた。大上古墳群は、野島稔の命名による（野島 1999）。古墳時代中期～後期を主とした古墳群であるが、これまでにその様相は一部が知られていたにすぎない。ここでは大上古墳群の各古墳を概観し、古墳群の位置付けについても検討したい。

２．大上古墳群の構成

大上１号墳（野島 1992・四條畷市史編さん委員会編 2016）　大上１号墳は、1992 年度の調査で検出したもので、直径 19.4mと推定される円墳である。墳丘部は平安期に削平されていて、墳丘内に埋葬施設は確認されなかった。幅４ｍの周溝を検出し、墳丘裾部では葺石が検出された。周溝内からは須恵器瑳・高坏・蓋坏・甕、土師器甕、手捏ね土器、鉄製刀子、馬具（バックル）、ガラス小玉 17 点、土玉 30 点、馬歯などが出土した。これらの出土遺物から、古墳時代後期の古墳とみられる。また、周溝内で埋葬施設２基を検出した。

１号埋葬施設は長さ 2.75m、幅 1.2m、深さ 0.6mの長方形で石に囲われていた。埋葬施設内では頭蓋骨・肩甲骨・上腕骨・大腿骨・膝蓋骨・歯など一体分の人骨を検出し、その被葬者の耳付近にあたる位置から金製耳環一対が出土した。また、棺内にあたるとみられる位置から土玉 230 点、鉄製刀子２本、鉄鏃６本が、棺外にあたると思われる位置から土師器壺、須恵器蓋坏が出土した。

２号埋葬施設は１号の北側約 10mの位置で検出し、長さ 1.4m、幅 0.7m、深さ 0.3mで、人頭大と拳大の花崗岩で長方形に囲われていた。その石組み内から人歯とともに碧玉製管玉１点、ガラス小玉 19 点、土玉 30 点、馬歯などが出土した。

大上２号墳（四條畷市史編さん委員会編 2016）　1992 年度の調査で古墳の周溝とみられる幅約２ｍ、深さ約 0.5mの溝を検出したものである。溝内から円筒埴輪、鳥形瑳、土師器碗、馬歯などが出土した。円筒埴輪は５個体以上が出土し、出土状況から検出した溝は古墳の周溝で、墳丘上に立て並べられていた円筒埴輪が転落したものとみられる。出土した円筒埴輪は高さ 45～52㎝、口径 26～27.5㎝あり、矢印状のヘラ記号があった。また、この溝から 2.5m離れた位置にも幅約 1.5m、深さ約 0.3mで同方向の溝があり、内部から円筒埴輪が出土した。いずれの溝も同一方向に若干弧を描いており、二重周溝の可能性も考えられるが、調査範囲が狭く古墳の墳形は不明である。出土遺物から古墳時代後期の古墳とみられる。

大上３号墳（村上 2006）　大上３号墳は、1997 年から 2003 年にかけての調査の結果、墳長約 37.5ｍ、周溝を含めた全長約 45m、後円部の直径約 28.6m、前方部長約９ｍの帆立貝形古墳であることを確認した。墳丘は二段築成で、花崗岩の自然石を用いた葺石と、円筒埴輪を伴っていた。周溝内からは円筒埴輪、形象埴輪のほか、須恵器等が出土した。墳丘残存部に主体部は検出できなかった。二段目まで残存しながら主体部が検出できなかったため、横穴系ではなく木棺直葬等も含めた竪穴系の主体部であった可能性がある。

円筒埴輪は立て並べられた位置を保っていた底部片が多くあり、基本的におよそ 10㎝間隔で立て並べられていたことがわかった。出土した埴輪には円筒埴輪のほか、蓋形埴輪や靫形埴輪などがあった。円筒埴輪はタテハケ調整のみのものが多いが、一部にヨコハケを施しているものも存在する。出土埴輪から、川西分類（川西 1978）Ⅳ群からⅤ群に移行する古墳時代後期初頭に築造された古墳とみられる。

大上４号墳（野島 1999、四條畷市史編さん委員会編 2016）　1998 年度の調査で周溝の一部を検出した。検出できた周溝の幅５ｍで、くびれ部を確認できたことから前方後円墳であることがわかった。墳丘は削平されていたが後円部径は 24mあり、全長約 40mと推定される。周溝内から、落ち込んだ花崗岩質の葺石や土器類、滑石製臼玉などが出土した。土器類のうち、北側周溝で出土した１点はほぼ完形に復元できる陶質土器壺で、大上３号墳の周溝から出土した土器片と接合した。出土遺物から古墳時代中期末の古墳とみられる。

第 25 図　大上古墳群の古墳位置図

大上５号墳（野島 1999、四條畷市史編さん委員会編 2016）　1998 年度の調査で墳形不明であるが横穴式石室を検出したもので、左側壁４石、右側壁１石が原位置を保っており、玄室の幅 1.7m、長さ 3.7mあった。羨道部は破壊されていたが、全長は６ｍほどの石室と考えられる。左側羨道で検出した１石は袖部のもので、左片袖もしくは両袖式とみられ（野島 1999）、発掘時の状況から両袖式と考えられている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。石室内の床面周囲には石組みの排水施設を備え、奥には石敷きの棺床が設けられていた。棺床の位置で鉄釘２本が出土し、木棺を用いたとみられる。副葬品は金銅装中空耳環１、青色ガラス小玉１、緑色凝灰岩質管玉１などがあった。石室内から瓦器碗、土師質土器皿、瓦質羽釜、白磁碗などが出土し、鎌倉時代に盗掘されたとみられる。出土遺物から古墳時代後期の古墳であろう。

大上６号墳（本書第３章）　大上６号墳は、2013-1 次調査で検出した古墳である。周溝は幅４ｍ、深さ約 0.6mの規模があった。周溝内からは埴輪が多く出土し、葺石が転落したとみられる拳大～人頭大の花崗岩もいくつか検出した。出土遺物から、古墳時代後期前半の古墳とみられる。しかし検出範囲が狭く古墳の墳形や規模は不明であった。出土埴輪は形象埴輪の器種が多くあり、石見型埴輪、馬形埴輪のほか、人物埴輪や蓋形埴輪の可能性がある破片も出土した。また、円筒埴輪の出土も多く、完形に復元できた個体も存在した。この古墳は埴輪を豊富に使用し、葺石も施す古墳であったとみられる。

大上７号墳（本書第４章）　大上７号墳は、周溝の一部を検出したのみで墳形・規模等は不明であったが、一定量の埴輪等の出土遺物があった。出土埴輪から大上６号墳とほぼ同時期の古墳時代後期前半の古墳とみられ、葺石を伴ったかどうかは不明であった。

大上８号墳（本書第４章）　大上８号墳は、延長 13.5mにわたって周溝の一部を確認し、直径 16.4ｍの円丘部をもつ古墳であることがわかった。同時に検出した溝３は、この古墳の周溝である周溝２出土遺物と出土した土器が接合し、方向も周溝２と同様に弧を描き平行する。この古墳の二重目の周溝である可能性があり、そうであれば前方後円墳の可能性も考慮されるが、全体を検出できたわけではないため、現時点では不明である。出土遺物はほとんどが土器で、埴輪はごく少量であり、大上７号墳より後出する特徴をもっていた。葺石はないものとみられる。これらの出土遺物からみて、大上８号墳は大上７号墳に後出する古墳時代後期中頃～後半に築造された古墳とみられる。

大上９号墳（本書第２章第１節参照）　1994 年度の調査で古墳の周溝の一部を検出した。周溝は北側肩のみの検出で、墳丘部である南側肩は調査区外であったため詳細は不明であるが、周溝の径は 14.2mほどに復元できる。おそらく円墳で墳丘の直径はおよそ 10mほどであろう。

大上 10 号墳（野島・村上 1999）　1998 年度に個人住宅の擁壁工事に伴い行なった調査で、古墳の周溝とみられる幅３ｍを超える溝を検出した。調査範囲が狭く古墳の墳形は不明である。この溝からは鉄刀や刀子などが出土した。

大上 11 号墳（本書第２章第１節参照）　1999 年度の調査で古墳周溝とみられる溝を検出したものである。周溝内から多量の土器が出土した。そのほとんどは須恵器であり、台付装飾壺、盌、高坏などをはじめ多様な器種があった。古墳の墳形は不明であるが、円墳であるとすれば直径 27m程度に復元できる。出土遺物から古墳時代後期の古墳とみられる。

ここまでがこれまで大上遺跡あるいは大上古墳群に属するものとして認識できた古墳である。このほか周辺での調査で明らかに大上古墳群に属するものとして、次の古墳があげられる。

大上 12 号墳（村上 2006）　木間池北方遺跡の 1995 年度の調査（KMH95-1）で確認した古墳である。『四條畷市史』考古編では「南側の古墳」と記述されている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。一辺 22mほどの方墳とみられる。確認できた周溝の幅は約７ｍ、深さ約 0.9mであった。墳丘部分は削平されており主体部は検出されなかった。周溝底部に直径約１ｍ、深さ約 0.5mの土坑を確認し、古墳時代中期後半ごろの土師器壺・高坏・甕、韓式系土器甕などが完形で出土した。なかには底部に穿孔のある甕も含まれており、古墳築造に伴い意図的に土器を埋納したとみられる。また周溝内からは、須恵器蓋坏・高坏・甕、韓式系土器甕、土師器甕・高坏、滑石製臼玉・有孔円盤などと、家形埴輪、Ｂ種ヨコハケ（川西 1978）を施す円筒埴輪が出土した。周溝内では人頭大の礫を一定数検出しており、葺石が存在した可能性も考えられる。出土遺物から古墳時代中期後半の古墳とみられる。

大上 13 号墳（村上 2000）　四條畷小学校内遺跡の 1996 年度調査で確認した古墳である。『四條畷市史』考古編では「西側」の古墳と記述されている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。一辺約 15m の規模を測る方墳で、検出できた周溝は幅約３m、深さ約 0.6mであった。東側と南側の周溝で周溝内土坑を検出した。遺物は周溝内から須恵器蓋坏・土師器把手付甕などが出土した。周溝内などで人頭大の花崗岩礫を多く検出しており、葺石が存在した可能性がある。出土遺物から古墳時代後期の古墳とみられる。

大上 14 号墳（村上 2006）　木間池北方遺跡の 1996 年度調査（KMH96-1）で確認した古墳である。『四條畷市史』考古編では「北側の古墳」と記述されている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。一辺約 16mの規模を測る方墳で、検出できた周溝は幅約４m、深さ約 0.8mであった。墳丘は奈良時代以降の集落によって削平されていた。周溝内からは須恵器蓋坏・壺などとともに円筒埴輪、鉄斧が出土した。周溝埋没時の上層土層に人頭大程度の礫が多くみられ、葺石が用いられた可能性がある。この古墳の周溝掘削後に、古墳時代後期前半とみられる時期の遺構が掘削されていたことと、出土埴輪の時期からみると、この古墳の築造も古墳時代後期前半にさかのぼる可能性がある。

大上 15 号墳（村上 2006）　木間池北方遺跡の 1996 年度調査（KMH96-1）、2003 年度調査（KMH03-1）で確認した。調査・報告時は、南側の旧河川にとりつく「コ」字状の溝と認識されていたが、『四條畷市史』考古編で、それが古墳の周溝を利用した形態である可能性が指摘された（四條畷市史編さん委員会編 2016）。出土遺物に古墳時代のものも多く含まれるため、この指摘は妥当であろう。古墳の規模は一辺 20m程度の方墳であろう。奈良時代に祭祀利用された溝のため、何度か再掘削されており、この溝の周溝としての正確な規模は不明であるが、検出範囲内では、最狭部の幅７mが、周溝幅に最も近い数値であろう。古墳時代の遺物は、須恵器蓋坏・壺・筒形器台、土師器甕・器台・甑・ミニチュア土器、土製当て具のほか、人物埴輪片、鉄斧などが出土した。古墳時代中～後期の古墳であろう。

これ以外に、城遺跡の 1997 年度調査（J097-2）で大上３号墳より東に 300m山側の箇所で検出した旧河川において古墳時代後期の円筒埴輪が出土している（村上 2006）。この円筒埴輪は旧河川出土ではあるが摩耗が少なく、周辺に同時期の古墳が存在した可能性が想定される。

また、この円筒埴輪が出土した箇所よりさらに東に 200m、大上３号墳からは東に 500mほど離れた字黒石とよばれる場所は、現在採土場となっているが、昭和初期の記録によれば土砂採取の際に陶棺が出土し、円筒埴輪も掘り出された古墳（黒石古墳）が存在したという（平尾 1931）。

第１表　大上古墳群の古墳一覧（空欄は未整理）

名称	墳形	規模	埴輪	葺石	時期	主な遺物・その他
大上１号墳	円	19.4		有	後期	刀子・馬具・馬歯。周溝内埋葬２基。
大上２号墳	不明	不明	有		後期	鳥形瑳・馬歯
大上３号墳	帆立貝形	37.5	有	有	後期初頭	二段築成。形象埴輪。
大上４号墳	前方後円	(40)		有	中期末	土器類・臼玉
大上５号墳	不明	不明	不明	不明	後期	横穴式石室。金環。
大上６号墳	不明	不明	有	有	後期前半	形象埴輪・臼玉・馬歯
大上７号墳	不明	不明	有	不明	後期前半	形象埴輪
大上８号墳	(円)	16.4	有	無	後期中～後	土器類・馬歯
大上９号墳	円	(10)				
大上 10 号墳	不明	不明				鉄刀・刀子
大上 11 号墳	(円)	27			後期	土器類
大上 12 号墳	方	22	有	有	中期後半	家形埴輪
大上 13 号墳	方	15	無	有	後期	土器類
大上 14 号墳	方	16	有	有	後期前半	鉄斧
大上 15 号墳	方	20	不明	不明	中～後期	人物埴輪・鉄斧
(黒石古墳)	不明	不明	有	不明	不明	陶棺

３．大上古墳群の位置付け

上記のように大上古墳群として捉えられる一連の古墳について概観してきた。大上古墳群は合計 15 基（黒石古墳を含めれば 16 基）の古墳から成り、古墳時代中期から後期にかけて築かれた古墳群であることをみてきた。

大上古墳群では、すでに指摘されているように馬歯の出土が多く、馬匹生産を担った人々の墓域であった可能性が考えられている（野島 2008・2009）。上記のように概観しあらためてみると、概要がわかる古墳のうち一定数で馬歯が出土しており、馬具の出土もみられる。このことから、これまでの指摘通り、大上古墳群は清滝古墳群・更良岡山古墳群と並び、馬飼い集団の墓域とみてよいであろう。

大上古墳群および周辺の旧河川等では、石見型埴輪の出土が一定数存在する。石見型埴輪は、朝鮮半島との交渉に深いかかわりをもった地域の古墳に樹立されていることが指摘されている（和田 2006）。大上古墳群は、上記のとおり馬匹生産にこの地域で携わっていた人々の古墳であったと考えられ（野島 2008・2009）、馬匹生産は、朝鮮半島から技術が導入され、半島との交渉を保ちながら行なわれたものであった。大上古墳群の調査でも周溝から馬歯や製塩土器が出土しており、馬飼いとの深いかかわりが想定できる。石見型埴輪の出土からも、大上古墳群が朝鮮半島と交渉をもつ馬飼い集団の墓域とみられることがさらに補強できると言えるだろう。

四條畷市域の馬飼い集落は、河内湖から飯盛山系へと続く標高差のある地形の中で、最低地に馬を陸揚げする港とそれに伴う集落（蔀屋北遺跡・讃良郡条里遺跡）が営まれ、低地の平坦部には水田域（鎌田遺跡・讃良郡条里遺跡）があった。集落（中野遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡・忍ケ丘駅前遺跡）および祭祀域（奈良井遺跡・鎌田遺跡）はやや標高の高くなった平坦地に営まれ、山裾の高所部に墓域である古墳群（清滝古墳群・大上古墳群）が営まれていた。このように大上古墳群は、それ単体で捉えるのではなく、周辺の遺跡も含めて捉え、その性格を把握すべきと言えるだろう。平地の馬匹生産集落に伴う、高所部の墓域と捉えたい。今後も、継続した発掘調査により、大上古墳群の全容のさらなる解明に努めていきたい。

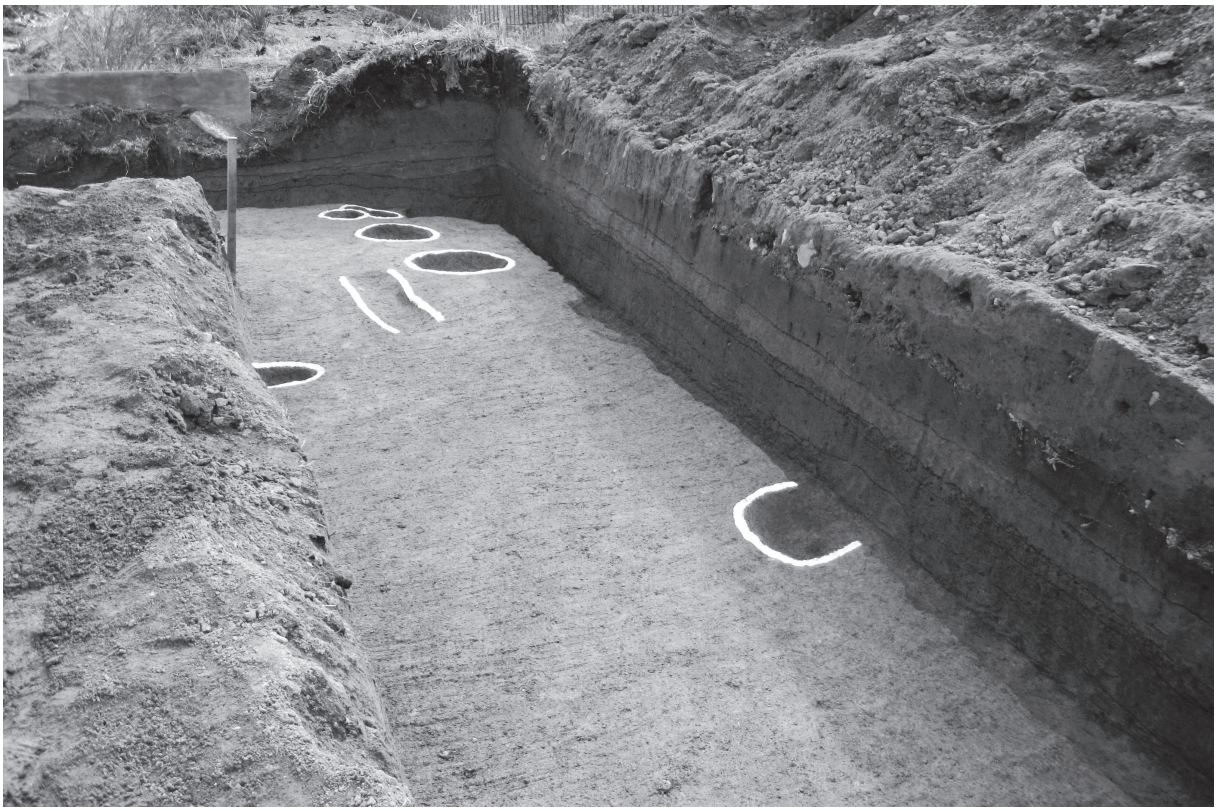
（實盛）

参考文献

後川恵太郎・實盛良彦・井上智博編 2015『讃良郡条里遺跡』四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
阿部幸一 1999『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅳ、大阪府教育委員会。
井上智博・多賀晴司編 2003『讃良郡条里遺跡』その２、財団法人大阪府文化財センター。
井上智博編 2008『讃良郡条里遺跡』Ⅵ、財団法人大阪府文化財センター。
岩瀬　透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編 2010『蔀屋北遺跡』Ⅰ、大阪府教育委員会。
岩瀬　透編 2012『蔀屋北遺跡』Ⅱ、大阪府教育委員会。
梅原末治 1937「河内四條畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第４、日本古文化研究所。
梅原末治 1985『銅鐸の研究』木耳社。
大賀克彦 2002「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会。
大阪府教育委員会編 1970『四条畷町、正法寺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会。
片山長三 1967a「枚方台地の先土器時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
片山長三 1967b「縄文時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。。
鐘方正樹 2009「率川古墳と外京条坊および出土埴輪」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 18 年度、奈良市教育委員会。
鐘方正樹・中島和彦 1992「菅原東埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』1991、奈良市教育委員会。
河内一浩 2008「河内における“いわゆる石見型埴輪”の様相」『古代学研究』第 180 号、古代学研究会。
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２号、日本考古学会。
木下保明編 2004『小路遺跡（その３）』（財）大阪府文化財センター。
京都府立山城郷土資料館 2016『山城の二大古墳群　－乙訓古墳群と久津川古墳群－』京都府立山城郷土資料館。
黒須亜希子編 2004『高宮遺跡（その２）』（財）大阪府文化財センター。
黒田　淳 1989「飯盛山城跡の調査」『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988 年度、大東市教育委員会。
黒田　淳 1997『北新町遺跡第３次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
黒田　淳 2013『飯盛山城遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
近藤章子・山本雅和・多賀晴司編 2006『讃良郡条里遺跡』Ⅳ、財団法人大阪府文化財センター。
近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社。
佐伯博光・六辻彩香編 2007『讃良郡条里遺跡』Ⅴ、財団法人大阪府文化財センター。
櫻井敬夫 1972「考古学」『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2006『こども歴史　わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2010『歴史とみどりのまち　ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市教育委員会編 2002『みどりの風と古墳』第 17 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編 2004『馬と生きる』開館 20 周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編 2008『ひとつぶの籾』第 23 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市史編さん委員会編 2016『四條畷市史』第５巻考古編、四條畷市。
瀬川芳則 1992「最古の木製下駄」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ、同刊行会。
大東市北新町遺跡調査会編 1991『北新町遺跡第２次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店。
辻本　武 1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
中尾智行・山根　航編 2009『讃良郡条里遺跡』Ⅷ、財団法人大阪府文化財センター。
中村　浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
西尾　宏1987『中野遺跡発掘調査概要』Ⅳ、四條畷市教育委員会。
西尾　宏1988『中野遺跡発掘調査概要』Ⅴ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1977「四條畷市中野遺跡」『まんだ』第２号、まんだ編集部。
野島　稔1978a『中野遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1978b「南山下遺跡」『まんだ』第５号、まんだ編集部。
野島　稔 1978c「大阪府四條畷市発見の製塩土器」『古代学研究』第 86 号、古代学研究会。
野島　稔 1979「岡山南遺跡出土の古代下駄」『まんだ』第８号、まんだ編集部。
野島　稔 1980a『清滝古墳群発掘調査概要』四條畷市文化財研究調査会。
野島　稔 1980b「四條畷市奈良井遺跡（２）」『まんだ』第９号、まんだ編集部。
野島　稔 1980c「四條畷市奈良田遺跡」『まんだ』第９号、まんだ編集部。
野島　稔 1981『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1982『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1983『忍ケ丘駅前遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1984『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1985「四條畷市南野米崎遺跡」『まんだ』第 24 号、まんだ編集部。
野島　稔 1986a『四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要―1985 年度―』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1986b『中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987a『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987b『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅳ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987c「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」『まんだ』第 30 号、まんだ編集部。
野島　稔 1987d「四條畷市南山下遺跡」『まんだ』第 30 号、まんだ編集部。
野島　稔 1987e「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅰ、韓式系土器研究会。
野島　稔 1988「四條畷市“南山下遺跡”」『まんだ』第 35 号、まんだ編集部。

野島　稔 1990「四條畷市・中野遺跡」『まんだ』第 39 号、まんだ編集部。
野島　稔 1991「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅲ、韓式系土器研究会。
野島　稔 1992「四條畷市・大上遺跡」『まんだ』第 47 号、まんだ編集部。
野島　稔 1993a「四條畷市忍ケ丘駅前遺跡」『まんだ』第 49 号、まんだ編集部。
野島　稔 1993b「四條畷市鎌田遺跡（一）」『まんだ』第 50 号、まんだ編集部。
野島　稔 1994a『雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1994b「四條畷市鎌田遺跡（二）」『まんだ』第 51 号、まんだ編集部。
野島　稔 1994c「四條畷市・四條畷小学校内遺跡」『まんだ』第 53 号、まんだ編集部。
野島　稔 1995『南野遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1996a「四條畷市坪井遺跡」『まんだ』第 57 号、まんだ編集部。
野島　稔 1996b「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第 58 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997a「五絃の琴」『まんだ』第 60 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997b「四條畷市更良岡山遺跡（一）」『まんだ』第 62 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997c『はにわはともだち』第 12 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
野島　稔 1999「四條畷市大上古墳群」『まんだ』第 66 号、まんだ編集部。
野島　稔編 2000『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 2006『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 2008「王権を支えた馬」『牧の考古学』高志書院。
野島　稔 2009「河内湖東岸における古墳と古代豪族の動向」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
野島　稔・藤原忠雄・花田照也1976『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔・藤原忠雄・花田照也1977『正法寺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔・前田　暢1984『岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始1999『正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2000『奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2001『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2002『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始・實盛良彦 2012『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
坂　　靖 2006「３　円筒埴輪技法の検討」『八条遺跡』奈良県教育委員会。
東影　悠 2008「古墳時代中期から後期における円筒埴輪の規格とその変質―円筒埴輪の４条５段構成化―」『待兼山遺跡』Ⅳ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会。
平尾兵吾 1931『北河内史蹟史話』（1973 年増補再刊）。
松岡良憲 1987『中野遺跡発掘調査概報』四條畷市教育委員会。
宮崎泰史・藤永正明編 2006『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館。
宮野淳一 1992『更良岡山遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
三好　玄・杉本厚典・野島　稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期周溝状遺構に伴う土器群」『大阪歴史博物館研究紀要』第６号、財団法人大阪市文化財協会。
六辻彩香編2006『小路遺跡』Ⅲ、（財）大阪府文化財センター。
村上　始1997a『木間池北方遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始1997b『忍ケ丘駅前遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始2000『四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001a『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001b『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001c「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。
村上　始2001d「四條畷市鎌田遺跡」『まんだ』第71号、まんだ編集部。
村上　始2001e「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。
村上　始2001f「四條畷市雁屋遺跡」『まんだ』第73号、まんだ編集部。
村上　始2003a『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2003b「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。
村上　始2004『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2006『一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第 14 回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
村上　始・實盛良彦 2013a『中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2013b『北口遺跡・讃良郡条里遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2014『四條畷市文化財調査年報』第１号、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2016『四條畷市文化財調査年報』第３号、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦編 2013『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会。
山口　博編 1972『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
山口　博 1990『四條畷市史』第４巻、四條畷市役所。
和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』第 53 巻第３号、考古学研究会。

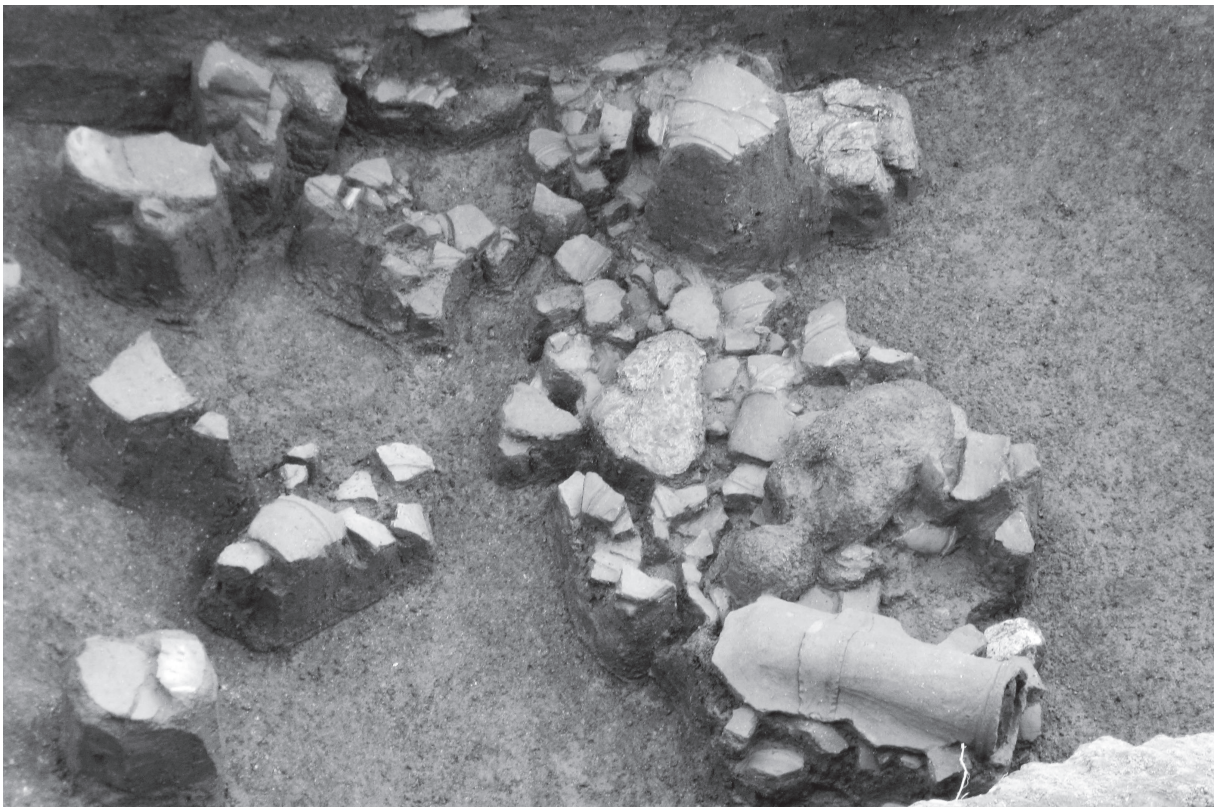
写　真　図　版　1



1．ＯＧ 2013 － 1　調査地区西側 Pit 群全景（北から）

2．ＯＧ 2013 － 1　周溝１遺物出土状況（西から）

写　真　図　版　２



１．ＯＧ 2013 －１　周溝１遺物出土状況（北から）

２．ＯＧ 2013 －１　周溝１遺物出土状況（北西から）

写　真　図　版　3

1．ＯＧ 2013 －１　周溝１動物骨出土状況（北から）

2．ＯＧ 2013 －１　周溝１完掘状況（北西から）

写　真　図　版　4

1．ＯＧ 2013 －２　１地区　遺構全景（北から）

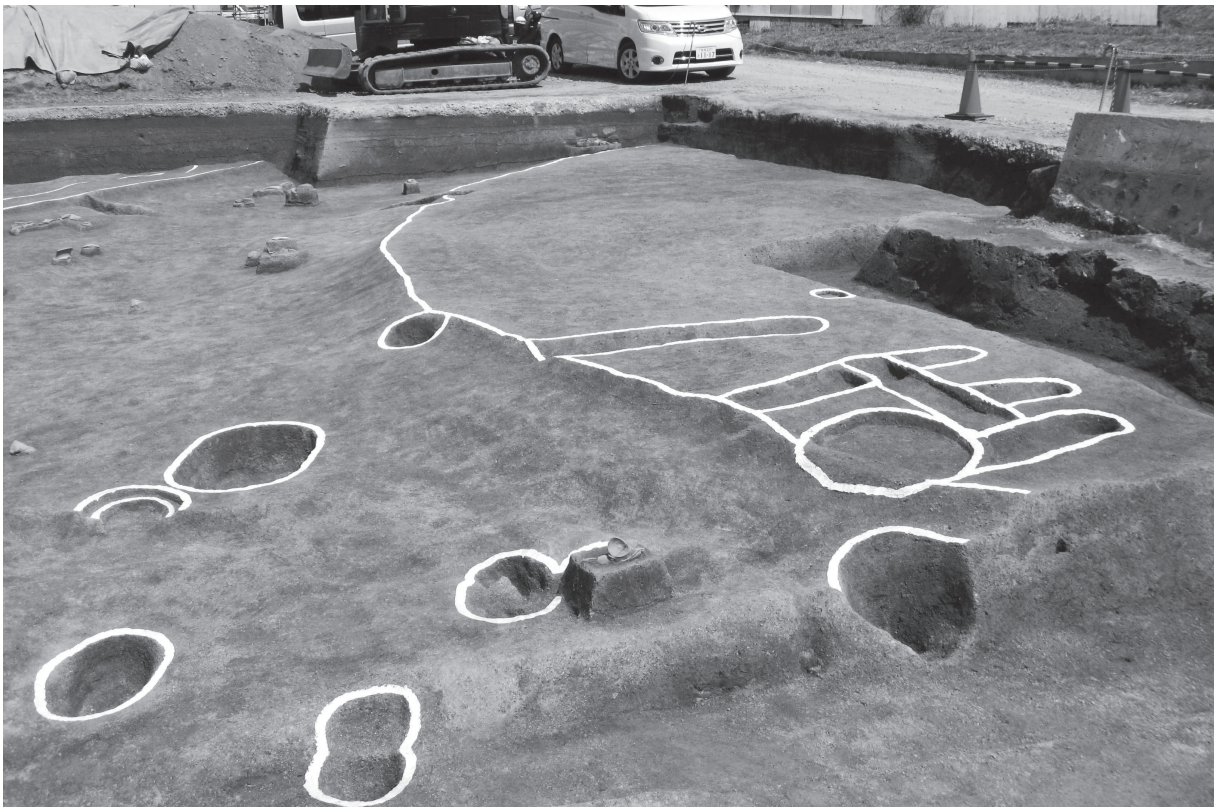
2．　ＯＧ 2013 －２　１地区　周溝１遺物出土状況（北西から）

写　真　図　版　5

1．ＯＧ 2013 － 2　２地区　遺構全景（北西から）

2．　ＯＧ 2013 － 2　２地区　遺構全景（北東から）

写　真　図　版　6

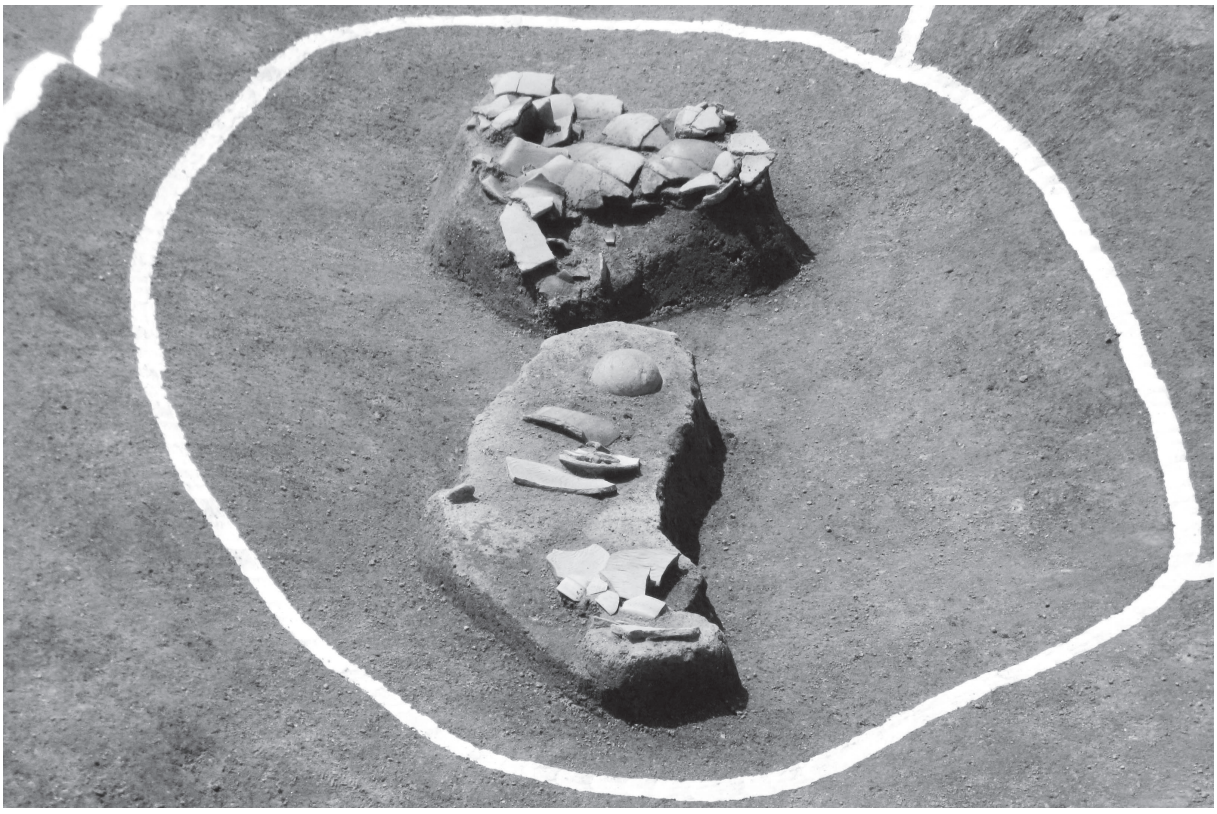


1．ＯＧ 2013 －２　２地区　遺構全景（南西から）

2．ＯＧ 2013 －２　２地区　周溝２馬歯出土状況（南から）

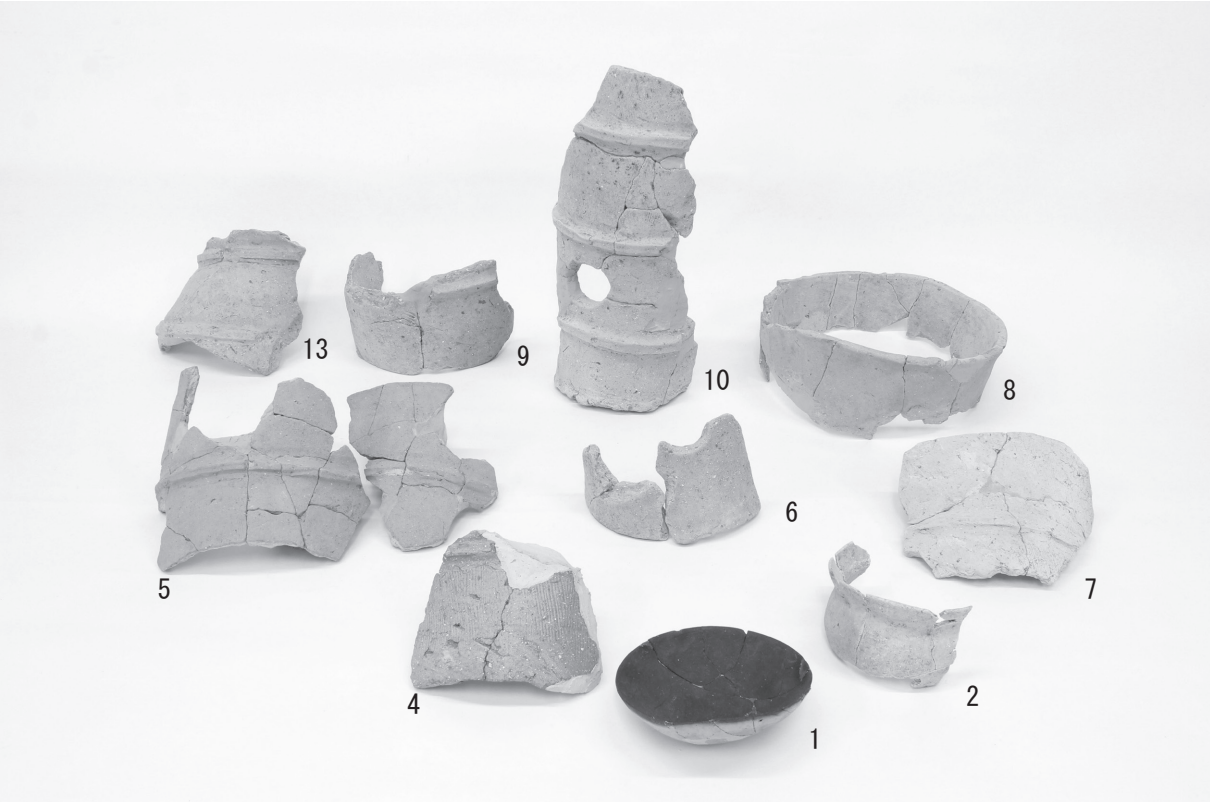
写　真　図　版　7

１．ＯＧ 2013 －２　２地区　周溝２遺物出土状況（北から）



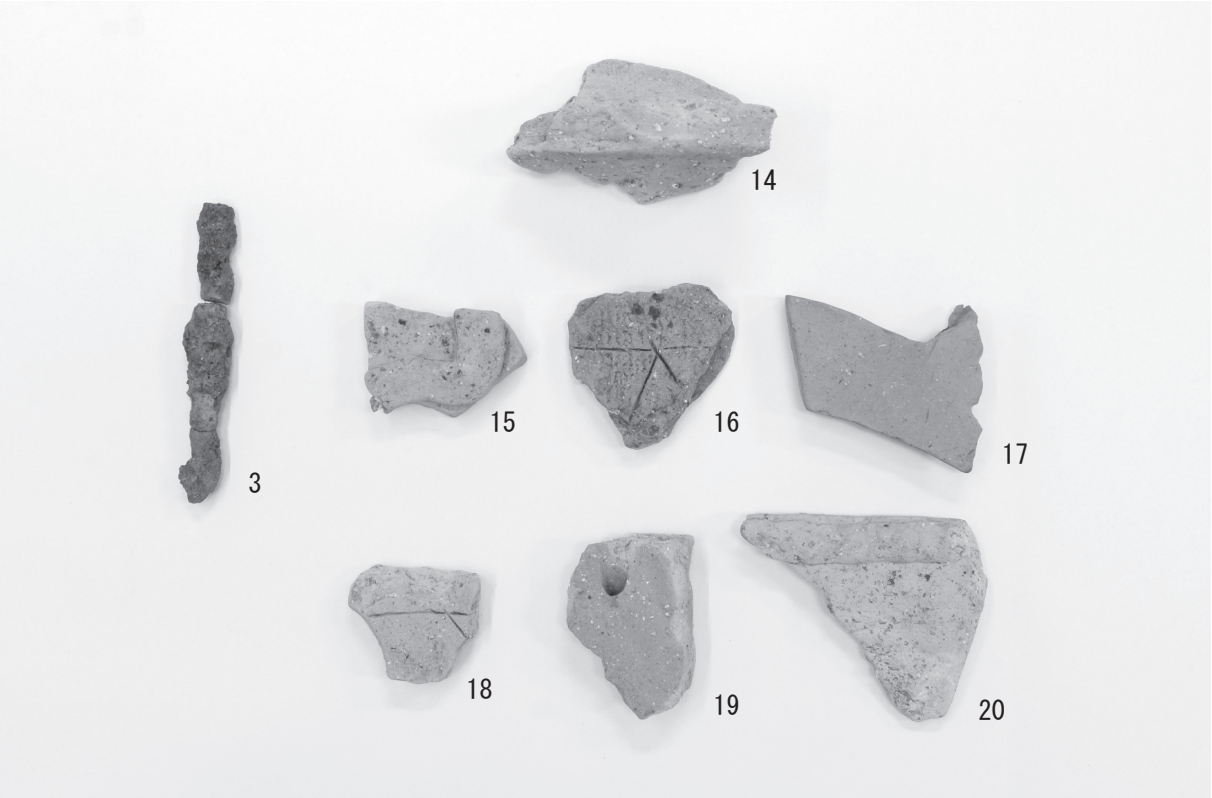
２．ＯＧ 2013 －２　２地区　土坑 40 遺物出土状況（北から）

写　真　図　版　8

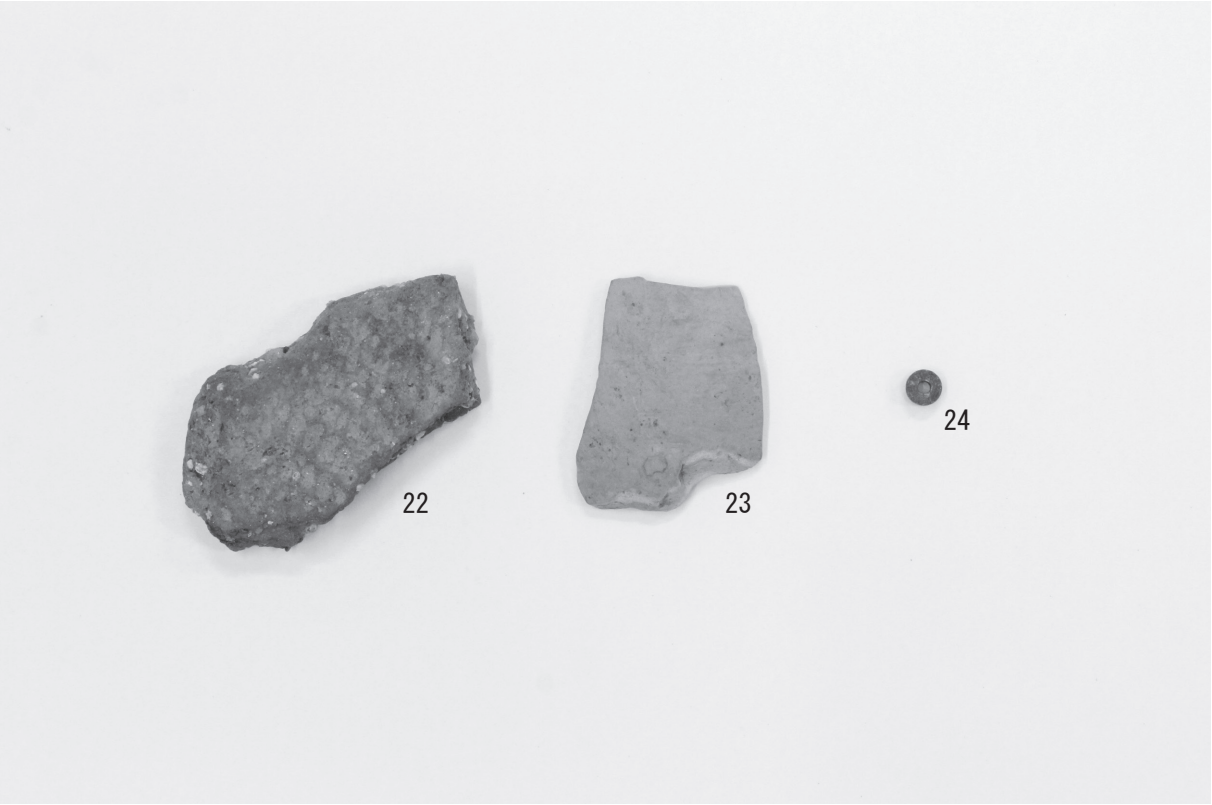


1．ＯＧ 2013 －１　出土遺物（1）

2．ＯＧ 2013 －１　出土遺物（2）



1．ＯＧ 2013 －１　出土遺物（3）



2．ＯＧ 2013 －１　出土遺物（4）

1．ＯＧ 2013 －１　出土遺物（5）

１．ＯＧ 2013 －２　出土遺物（包含層）

２．ＯＧ 2013 －２　出土遺物（確認調査）

1．ＯＧ 2013 － 2　出土遺物（周溝１）

2．ＯＧ 2013 － 2　出土遺物（周溝１）

1．ＯＧ 2013 － 2　出土遺物（周溝２）

2．ＯＧ 2013 － 2　出土遺物（土坑）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぽう
書 名	四條畷市文化財調査年報
巻 次	第４号
副 書 名	大上遺跡（大上古墳群）
シ リ ー ズ 名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第 54 集
編 著 者 名	村上　始・實盛良彦（編集）、村上・實盛・木村　理・村瀬　陸（執筆）
編 集 機 関	四條畷市教育委員会
所 在 地	〒575-8501　大阪府四條畷市中野本町１番１号
発 行 日	2017(平成 29)年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおがみいせき 大上遺跡 （ＯＧ2013-1）	しじょうなわてし おおあざきよたき 四條畷市 大字清瀧	272299	34° 44′ 20″	135° 38′ 55″	平成 26 年１月 14 日～平成 26 年１月 24 日	52 ㎡	宅地造成・集合住宅建設
おおがみいせき 大上遺跡 （ＯＧ2013-2）	しじょうなわてし おおあざきよたき 四條畷市 大字清瀧	272299	34° 44′ 19″	135° 38′ 57″	平成 26 年２月 24 日～平成 26 年４月 21 日	530 ㎡	老人福祉施設建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大上遺跡 （ＯＧ2013-1）	古墳 集落跡	古墳	周溝、 溝、土坑	土師器、黒色土器、埴輪、鉄製品、石製品	古墳周溝を検出 （大上６号墳）
大上遺跡 （ＯＧ2013-2）	古墳 集落跡	古墳	周溝、 溝、土坑	土師器、須恵器、埴輪	古墳周溝を検出 （大上７・８号墳）

四條畷市文化財調査報告　第 54 集

四條畷市文化財調査年報

第 4 号

大上遺跡（大上古墳群）

平成 29（2017）年3月 31 日発行

編　集　四條畷市教育委員会

発　行　四條畷市教育委員会

大阪府四條畷市中野本町1番1号

印　刷　株式会社 共英印刷所